昭和二十九年三月

文化財調査報告 第三集

江刺郡稲瀬村樺山遺跡

岩手縣教育委員会

樺山遺跡調査報告

坂江彌
池菊啓次郎
東司眞雄
邊渡直経

序

本県江刺郡稲瀬村にある樺山遺跡は、地元の研究家菊池啓次郎、司東眞雄両氏の郷土文化財に対する熱意と慶應大学江坂輝彌氏、東京大学渡辺直経氏の学問的意欲とによつて、前後三回にわたり、極めて精密な調査が行われたことは、誠に喜ばしい限りであつて、衷心より敬意を表したい。

本遺跡は、昭和二十六年十月予備調査を完了し、翌二十七年三月一先ず予報を刊行したのであるが、更に引続き本格的な調査を実施してほゞその全貌を明かにすることができたので、今回その報告書を公刊する運びにいたつたのである。

我が国における石造遺構は、各地において発見されているが、いまだその性格を確定するに至つていない。研究途上にある石造遺構の事例としての樺山遺跡は、上記研究家の愛情と専門的知識とがマッチして、忠実に原型のまゝの発掘がなされたこと、東北地方における唯一の縄文式文化中期の遺構であることからして、最も貴重な考古学史の報告書と認められる。

この機会に、上記四氏の御努力に衷心より謝意を表するとともに、本県の文化財保護の立場よりも、又考古学研究の上からも、廣く本報告の活用を期待してやまない。

昭和二十九年三月

岩手県教育委員会

教育長　山中吾郎

目次

序……一
調査日誌……二
遺跡……五
一　位置……五
二　石造遺構群……五
三　住居址……三
遺物……二五
一　石造遺構群出土の文化遺物……二五
二　住居址出土の遺物……二六
石造遺構下竪坑内土壌の燐分析……二九
考察……三三
結語……三八
追記……三九
附錄……四一
一　石造遺構使用の川原石の石質……四一
二　奥羽地方石造遺構発見地地名表……四二

挿図目次

第一図　樺山石造遺構群配置図
第二図　第四号址実測図
第三図　第五号址実測図
第四図　第六号址実測図
第五図　第七号址実測図
第六図　第八号址実測図
第七図　第九号址実測図
第八図　第一〇号址実測図
第九図　第一一号址実測図
第一〇図　第一二号址実測図
第一一図　第一三号址実測図
第一二図　第一四号址実測図
第一三図　第一五号址実測図
第一四図　第一六号址実測図
第一五図　第一七号址実測図
第一六図　第一八号址実測図
第一七図　第一九号址実測図
第一八図　第二〇号址実測図
第一九図　第二一号址実測図
第二〇図　櫓上より撮影の第二一号址
第二一図　第二二号址実測図
第二二図　第二三号址実測図
第二三図　第二四号址実測図
第二四図　第二五号址実測図
第二五図　西南部よりトレンチ全景
第二六図　住居址実測図
第二七図　第一一号址発見の片口附石皿
第二八図　第一二号址発見の石皿
第二九図　住居址出土、大木7b式鉢形土器実測図
第三〇図　土器片断面図
第三一図　土偶拓影実測図

図版目次

第一図版　第一図　樺山石造遺構群全景（西北部櫓上より撮影）
　第二図　西側より撮影の第四号址
第二図版　第一図　東側より撮影の第四号址
　第二図　西方より東側石組下の竪坑を望む
第三図版　第一図　第四号址東側石組下の竪坑
　第二図　第四号址西側碁石状積石下の石組
　第三図　第四号址西側碁石状積石下の竪坑
第四図版　第一図　南側より撮影の第六号址
　第二図　西南側より撮影の第七号址
　第三図　南側より撮影の第八号址
第五図版　第一図　西北側より撮影の第九号址
　第二図　西南側より撮影の一〇号址
　第三図　西側より撮影の一一号址
第六図版　第一図　東側より撮影の一一号址
　第二図　西北側より撮影の一二号址
　第三図　東南側より撮影の一二号址
第七図版　第一図　第一一（右）一二（左）号址使用の石皿
　第二図　第一一（右）一二（左）号址使用の石皿裏面
第八図版　第一図　南側より撮影の第一三号址
　第二図　西側より撮影の第一四号址
　第三図　西南側より撮影の第一五号址
第九図版　第一図　西南側より撮影の第一六号址
　第二図　西南側より撮影の第一七号址
　第三図　東南側より撮影の第一八号址
第一〇図版　第一図　西側より撮影の第二〇号址
　第二図　南側より撮影の第二一号址
　第三図　西側より撮影の第二二号址
第一一図版　第一図　西南側より撮影の第二五号址
　第二図　西側より撮影の住居址
　第三図　土器を利用した主炉と副炉
第一二図版　第一図　住居址東隅出土の鉢形土器
　第二図　大木7b式鉢形土器
　第三図　住居地区トレンチ出土の中期土器片
第四図　住居址出土の中期の土偶

江刺郡稻瀬村樺山遺跡調査報告

江坂輝彌
菊池啓次郎
司東眞雄
渡辺直経

序

今日、茲に樺山遺跡の調査報告が公刊出来るに至つたことは実にわれわれ調査担当者としても喜びにたえぬところである。

昭和二五年一〇月、司東が本遺跡を発見、翌二六年一一月二二、二三両日、県当局並びに村役場の理解ある協力を得て、第一回の発掘調査を実施、その結果を県文化財調査報告、第二輯として昭和二七年三月、『江刺郡稻瀬村樺山遺跡調査予報』と題し公刊した時までは、本石造遺構群が第一回調査地域の西南部にかくも多数埋沒しているとは夢想だに考へ得なかつたところであり、予報公刊後、昭和二七年四月二〇日よりの本調査に於て、十ヶ所内外の石造遺構を発見出来ればと考へていたところであつて、黒沢尻工業高等学校、黒沢尻高等学校の生徒諸君のボーリング棒探索によつてこのように多数の石造遺構が発見され、そのすべてを完全に調査し得たことは、県内にこのような貴重な遺跡を発見できたと云うことのみでなく、わが国考古学界に寄與するところも亦甚大なるものがあつたと確信致す次第である。

近年日本の新石器時代の繩文文化前期末以降の遺跡の中に、環状列石、環状組石、配石遺構などと呼ぶ用途不明の石造遺構の所在が注意に上つており、この種遺構は西は近畿地方より北は北海道にまで分布しているようであるが、今日までにその発見頭初より専門学者の手によつて、周到な準備のもとに発掘調査のなされたものは極めて僅かな例よりないのであり、本遺跡程度の規模のものは本州に於ては本遺跡調査後、慶応義塾大学文学部考古学研究室の手で調査した本県松尾鉱山屋敷台附近発見のものと、栃木

県船生遺跡の例がある程度である。従つて本遺跡の調査は日本考古学史上にも重要な位置をしめるものである。

尚本報告書公刊にあたり、終始この調査に理解ある協力を給り、時には調査員一同に種々鞭達の言葉も與へられた、県教育庁、前社会教育課長、現黒沢尻町教育長の佐々木修氏、又調査に対し終始協力をおしまれなかつた県教育庁社会教育課主事山内一氏、岩手大学学藝学部学生伊藤誠一氏、同農学部学生佐々木正剛、菊池増次郎の両氏、又調査に対し直接、間接種々御協力下さつた及川政敏助役以下村役場の方々、村会議員諸氏、又調査中調査に対し直接協力された黒沢尻工業高等学校、黒沢尻高等学校、岩谷堂高等学校稲瀬分校教職員生徒有志の諸氏其他直接間接種々御協力をいただいた地元の各位に対し本報告書を通じ衷心感謝の意を表する次第である。

又本遺跡の重要性を認められ、農地法による開墾を一時停止され、開墾入植者への代換地の考慮などなされた村役場当局、農地委員、地方事務所などの理解ある配慮に対しても万腔の謝意を表する次第である。（以上江坂輝彌記）

調査日誌

昭和二七年四月二〇日（日）晴

第一次調査の際、発掘調査をなし、其後埋沒しておいた、一、二、三、四、五、六各号址を再び露出すると共に、県立黒沢尻高等学校及び県立黒沢尻工業高等学校の生徒諸君によつて附近一帯に埋沒されていると推定される新石造遺構をボーリング棒により探査してもらう。

探査の結果、五ヶ所において新石造遺構を発見、各々七、八、九、一〇、一一号址とする。

いづれも配石構造を異にするものであり愼重に発掘を進めてゆく。

本日の調査参加者は、調査員・菊池啓次郎、司東真雄、補助員・伊藤誠一、佐々木正剛、菊池増次郎、応援協力された生徒諸君は黒高五名、黒工高一〇名、同定時制高五名及び人夫五名であつた。又本日岩手県庁秘書課の小岩末治氏が見学のため来訪された。

四月二一日（月）晴

人夫によつて写真撮影用の櫓を組み始める。

又一方叢林の刈拂いをさせる。又高校生諸君には昨日に引続き新石造遺構探索のため、ボーリング棒による探査に努力してもらう。

午後に至り一一、一二号址は組石中に石皿を利用した、後世の破壊を全く受けぬ完存せる石造遺構であるらしきことが判つてくる。

本日のボーリング棒探査の結果一二、一三、一四、一五、一六、一七号址を発見する。

昨日来一部の人々によつて発掘され、露出した遺構の写真撮影、竝びに測量を開始する。

本日の調査参加者　調査員菊池、司東、補助員伊藤、佐々木、菊池(増)。黒高生五名、黒工高生一二名、人夫五名

四月二二日（火）朝のうち聚雨あり、晴時々曇り、風強し。

江坂来着、種々調査方針について菊池、司東と打合せをなす。

県教育庁社会教育課文化財係の山内一主事来援。

昨日に引続き一八、一九、二〇号址を発見する。本日は今日までに新発見の石造遺構址の発掘に全力をそゝぐことにする。

本日の調査参加者、調査員江坂、山内、菊池、司東、補助員伊藤、佐々木、菊池(増)。黒高生三名、黒工高生一九名、人夫五名

見学者　江刺教育出張所社会教育主事佐々木龜三郎氏、江刺地方事務所農地課長菊地祐二氏。

四月二三日（水）晴、雲多し

二一、二二号址発見、完掘する。

本日より各石造遺構下のローム層にローム層を掘り込んだ穴の有無の調査も開始する。又各遺構についての測量は愼重を期し、作業速度を早めず確実に実施する方針をたてる。又暗箱組立写真機によつてキヤビネ乾板による報告書図版用の記録写真の撮影を開始する。

本日の調査参加者　調査員江坂、菊池、司東、補助員伊藤、佐々木、菊池(増)、黒高生五名、黒工高生一一名、人夫五名

四月二四日（木）晴

発掘の完了した各石造遺構の写真撮影、測量をなす。

本日午後一時より稲瀬村及び岩手県教育庁主催で、稲瀬中学校講堂において江坂が樺山遺跡についての調査概要の報告講演をな

し、併せて静岡市登呂遺跡のスライドを公開する。

本日の調査参加者、調査員、江坂、菊池、司東、補助員伊藤、菊池(増)、黒高生五名、黒工高生一〇名、人夫五名。見学者、江刺教育出張所副所長大島直氏、同地方事務所菊地農地課長、稲瀬村中学校生徒約五〇名、同小学校生徒六〇名、稲瀬村助役及川政敏氏、岩手短大学教授及川儀左衛門氏。

四月二五日（金）晴後曇

二三、二四号址を発見、完掘する。又本日遺構群所在地域に東北より西南に向つて遺跡を横断する巾一米五〇のトレンチを設定発掘を開始する。

トレンチ東北部に小石塊群在する地区数ヶ所発見されるも、石造遺構の破壊されたもの残存するものの一部であるか、どうかは不明、又石造遺構群地域より東方約一五〇米、石造遺構群地域より台上の高位置、彌五郎堤南側台上畑地に所在の、縄文文化中期の土器片など夥しく散布する、石造遺構を遺した人々の聚落遺跡と思われる地域を、岩谷堂高等学校稲瀬分校の生徒諸君の協力を得て、東南より西北に向けて長さ五十米、巾一米五〇のトレンチを発掘、多数の土器片が出土した。又トレンチの西北部に一住居址を発見する。

又江坂は昨日に引続き各石造遺構の写真撮影をなす。

本日の調査参加者　調査員江坂、菊池、司東、補助員伊藤、佐々木、菊池(増)。黒高生五名、黒工高生一五名、岩谷堂高校昼間定時制稲瀬分校男女約九〇名、人夫五名。見学者県教育庁社会教育課長佐々木修氏、同主事菊地又男氏、同主事山内一氏、稲瀬村助役及川政敏氏、同吏員小沢氏。

尚本日午後三時に現地で、調査員　佐々木課長、山内主事、及川助役など集り、本遺跡の保存について懇談する。

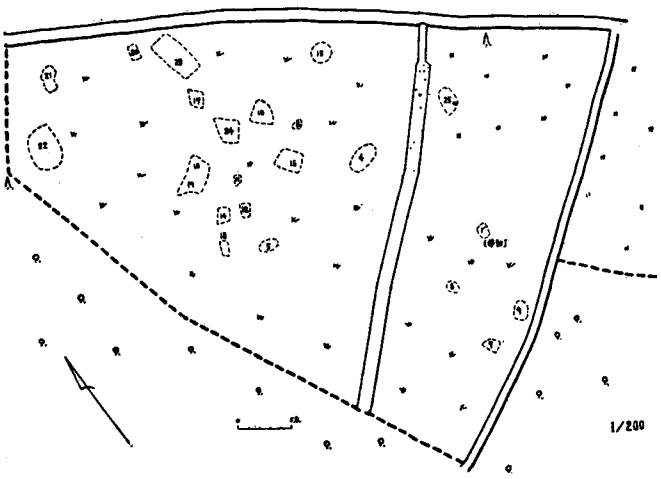
四月二六日（土）午前中小雨、午後本降りとなる。

午前中雨中を石造遺構群全地域の平板測量を江坂が担当で実施する。石造遺構群中に設定したトレンチ東北部、東側に発見の二五号址を完掘する。菊池は前日に引続き個々の石造遺構の実測をなす。

午後、菊池は各石造遺構下のローム層中に掘り込んだ穴の存在の有無の探索をなす。

江坂は平板測量完了後、司東と共に昨日発見の彌五郎堤南側台上畑地の住居址の全域発掘に努力する。住居址中央附近に炉ぶち

に口縁、底部を欠いた土器を使用した炉址を発見する。床面に木炭末多く、火災を起した住居址の疑あり。午後三時頃降雨はげしくなり発掘調査は本日をもつて一旦中止することとし、炉址の写真を撮影後、住居址は埋没する。又石造遺構下の穴の調査も一一、一二、二一号址は調査未了となる。



第一図　樺山石造遺構群配置図

本日の調査参加者、調査員江坂、菊池、司東、補助員伊藤、佐々木、菊池(増)、黒高生五名、黒工高生一五名、岩谷堂高校稲瀬分校五名。見学者小田島祿郎氏。

以後、石造遺構下のローム層に穴を掘り込んであるかどうかの調査を残したのは菊池が中心となり八月一八日までに三回に亘つて調査した。この間五月下旬の調査には早稲田大学文学部考古学研究室の櫻井清彦氏の協力を受けた。

又住居址は八月一八日、江坂の指揮で、司東、岩大の伊藤、黒工高生二名などの協力を得て全貌を明らかにすることができた。(以上菊池啓次郎記)

遺跡

位置

本遺跡は北上川左岸の第三紀層を基盤とする標高一〇〇米内外の西南へ傾斜する台上にあり、行政区劃は岩手県江刺郡稲瀬村大字稲瀬字大谷地六五番地となつている。尚遺跡の位置についての詳細は予報[註]に記したところであり、本報告には省略する。又今回二〇ヶ所余の石造遺構を発掘した地域は昭和二六年一一月、一号址より三号址を発掘した上野錬三氏開墾畑地の北西部の菊地幸治氏開墾予定山林内であつた。(第一図版第一図及び第一図測図参照)

註　岩手県文化財調査報告第二輯　昭和二十七年三月参照

石造遺構群

今回は第四号址より第六号址を再調査し、新に発見した第七号址より第二五

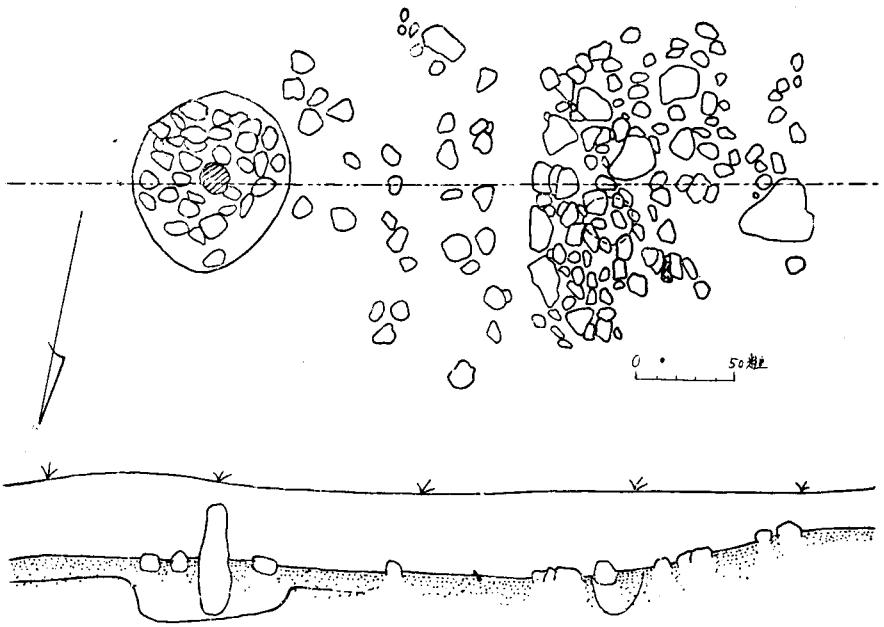
号址を発掘調査した。又第一号址は上野錬三氏畑地より菊地幸治氏開墾予定地の史跡指定予定地域へ移動した。（第一図参照）

第四號址（第二図、第一図版～第三図版）

昭和二六年一一月第一次調査においては長径三米三〇糎、短径二米の範囲内に概ね一〇糎内外の直径をもつ碁石状の川原石が無秩序に配石され、長軸の北端に近く小立石の所在することが判明したが、今回の再調査によつて、碁石状の川原石を配石した下にこれより大なる石を使用した半円形の配石のあることも判明、又これは一つの組石でなく二組の別個のものが相接して作られたものであるらしきことなど、最初の調査の折りより稍々複雑な様相を示すものであることが判つたのである。

即ち本号址は前記した立石の周辺の地区（東側）と、碁石状の川原石を無秩序に乱積し、その下にそれを囲むように稍々大形の川原石が半円形に配石された地区（西側）との二つにわけて考察した方が穏当であるように思われる遺構であつて、新に計測し直した結果、長径四米四三糎、短径一米九五糎の中に前記の二つに区劃さるべき遺構を含むもので、小立石をもつ区劃は長径八五糎、短径七五糎であつて、略中心に立石があり、立石は発掘面より高さ二八糎あつた。（立石自体の長さは五七糎、最大巾一七糎）

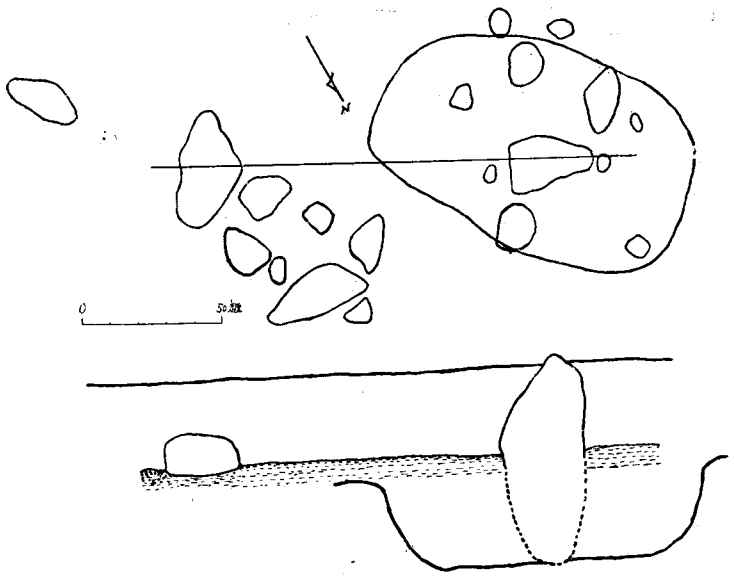
この立石の下がローム面を掘り込めているかどうか調査したところ、立石を中心として、その下部に径八〇糎乃至九三糎、深さ三三糎の略円形をなす、底面は北側が若干傾斜した小竪坑が認められた。坑内の土は茶褐の土層が撹乱された状態で堆積しており



第二図　第4号址実測図

微細な木炭末が僅かに認められた外、他に何物も出土しなかつた。この穴は立石を立てるために堀つたものとしては若干規模が大きいように思われる。（第二図版第二図、第三図版第一図参照）

他の西南側の遺構は長径一米七〇糎、短径一米四〇糎の範囲内に径四〇糎乃至二〇糎の川原石が略半円を描くように配石され、その中心に長径三〇糎、短径二〇糎の川原石が置かれてありその間に碁石状の川原石が積まれてあつたのである。尚半円状の川原石は過去においては円形をなしていたものが、西側は後世ある時代に開墾などで耕作された際、鍬先にかゝり堀り上げられてしまつたものであるかとも思われるが明らかでない。この遺構の略中央部には直径二五糎、深さ二〇糎の柱穴の如き小さな穴がローム層に堀り込まれていた。穴内には撹乱された茶褐色の土壌があり、その中には僅かな木炭末が認められた。又この遺構の碁石状の川原石の中に短冊形の打製石斧が一個混在して発見された。（第三図版第二図、同第三図参照）



第三図　第5号址実測図

第五號址（第三図）

第一次調査の折り既に一度調査されたものである。本址はその西端に他の組石上面より、高さ五糎突出した立石がある。立石自体の長さは七五糎、最大巾三〇糎であつた。その立石周辺と、更に東に延びて、径二〇糎乃至三五糎大の川原石と五糎大の川原石が乱雑に自然に散らばつたような状態に埋没していた。

この遺構にもローム層を堀り込めた竪坑が存在するかどうかを調査したところ、立石を中心として黄褐色ローム層中に入りこんで茶褐色の撹乱された土層がつまつた穴があることが判つた。竪坑とローム層との境界は明かでなく調査は困難をきわめた。計測の結果によれば、竪坑は口径は略南北に長径二米二七糎、東西短径一米四二糎の長方形

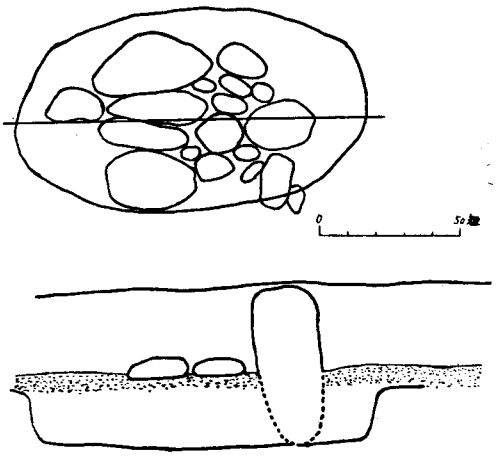
の穴で、深さは四〇糎であつた。

この穴も立石を埋沒するために堀られたものとしては少し大き過ぎるようであり穴内は詳細に調査したのであつたが、茶褐色土壌内には何物も認められなかつた。ただ底面の茶褐色土壌の一部に僅か黒味を帶びたところが認められた。

尙本号址の組石は後世の開墾などによつて組石の大部分が抜き取られ破壊されたものと考へられ、現在の原形を止めていないものと考へる。

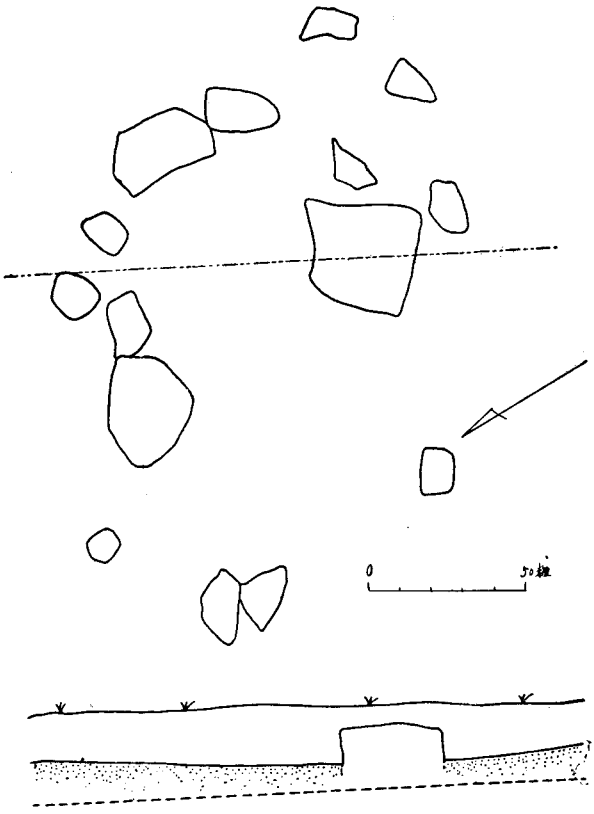
第六號址（第四図、第四図版第一図）

本址も四号、五号址同様既に第一次調査の折り一度調査したものである。



第四図　第6号址実測図

この遺構は北東端に他の川原石面より高さ三〇糎地表面に向つて突出した立石があり、立石の頭部は発掘前には薄く土をかぶり、落葉の下に僅かに埋もれていた。この立石は花崗岩質の棒状の川原石で、長さは五七糎、最大巾二三糎のものであつた。他の川原石は遺構の長軸に並行に二段に延びて整然たる形を保つているもので配石当時の原形を保つているものと考へられる。



第五図　第7号址実測図

今回の調査では配石遺構下のローム層を堀込んでいるかどうかを調査したのであつたが、遺構下に長径二米二五糎、短径一米四三糎、深さ二五糎の楕円形の竪坑が堀られていることが判明した。竪坑の内部には攪乱された茶褐色土壌がつまつており、この中に微細な炭末が散在しているのが認められた。又竪坑底面に接して一五糎内外の山石が一個発見された。

この竪坑はかなり大なるものであり、立石を埋沒する以外の用途をもつものと思考されるものである。

尚竪坑中央下部に僅かな黒色有機土らしきものが認められたので、この土を採集し渡辺直経氏に燐分析をお願いした。

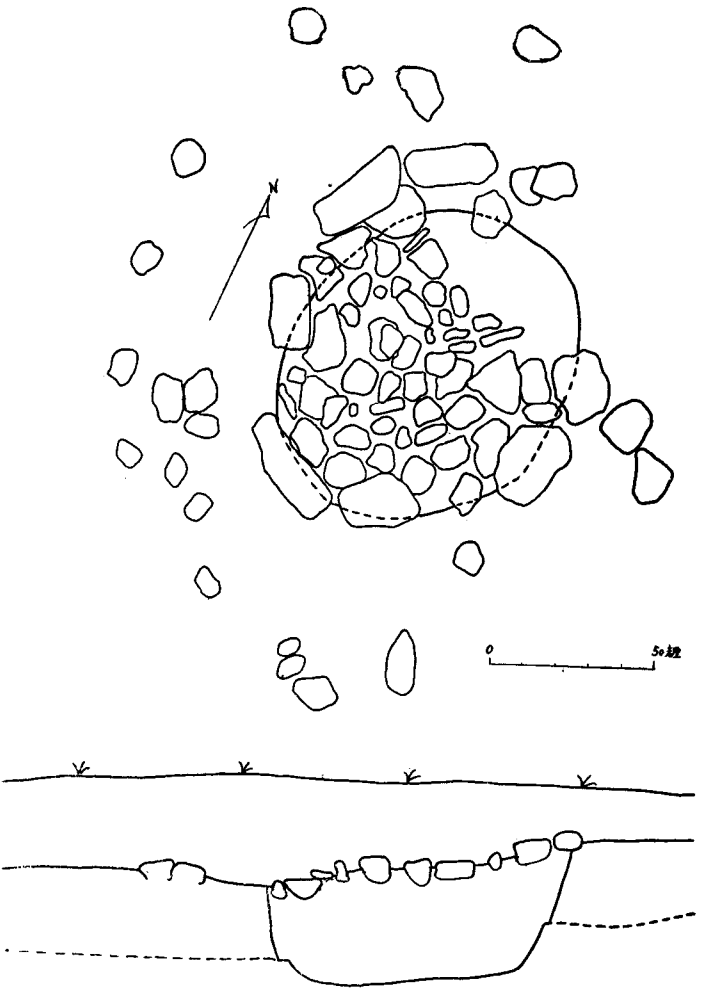
第七號址（第五図、第四図版第二図）

調査地区の南端部に発見された本址は約二〇糎の黒褐色土層で蔽われていた。

第二層の茶褐色土層上面に接し、長径二米〇五糎、短径一米二〇糎の範囲中に径約一〇糎～三〇糎の川原石を使用、略半円形に配列されたような状態で埋沒していた。

遺構下の穴の有無を調査するため、中央に巾三〇糎のトレンチを掘つたのであつたが、穴らしき跡は発見できなかつた。

又この遺構は或は過去に於ける耕作などによつて一部が破壊され、配石の一部も堀り出され



第六図　第８号址実測図

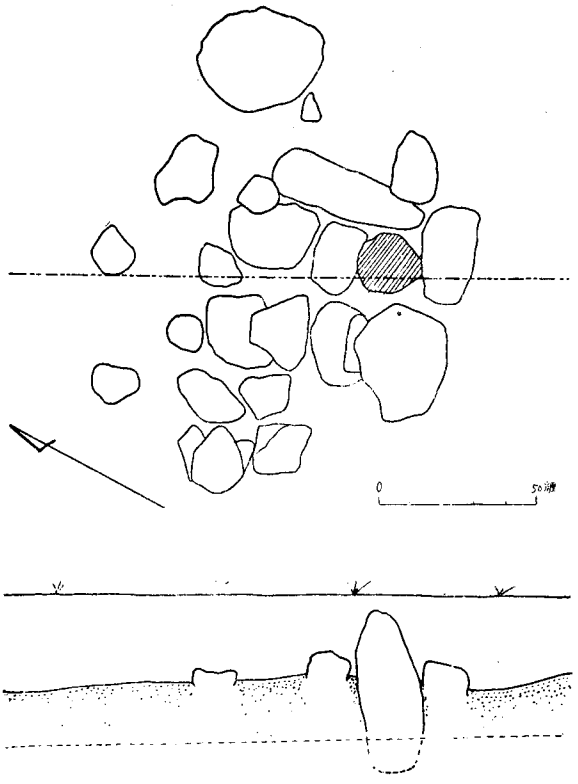
てしまつたもののようにも思わる。

第八號址（第六図、第四図版第三図）

本遺構は長径一米三〇糎、短径一米一〇糎の範囲内に、略三〇糎乃至二〇糎大の川原石を、底面を茶褐色土層の上面に接して略円形に配石し、その中に略径一〇糎内外の扁石状又はこれに類する形の川原石を使つて、一面に敷き竝べたもので、円形に配石した外廓の列石は石自体の長軸を利用して配石されていた。

尙この遺構は発掘前には約二五糎の黒褐色土層下に埋沒されていた。

又更に中につまつている石をとり上げてゆくと、外廓の列石の下側に、外廓の列石に重つたような状態で、内部にも大形な石が二重に少しせり出し気味に配石されており、本遺構の配石構造は相当複雑なものであれことが了解されるのである。



第七図　第9号址実測図

又この遺構下に長径一米、短径八〇糎、深さ三糎の不整円形の竪坑があつたことが確認されたが、四竪坑内には茶褐色の攪乱された土壌が充満していたのみで、他に何物も発見されなかつた。

又遺構周辺に約二〇個ほどの川原石が散在していたが、これが曾つて遺構の外周に配石されたものの一部が残存したものであるか、又遺構の一部が過去に於て破壊され散在したものか、いづれとも明らかにすることができなかつた。

尙本遺構の内部配石中より形式不明の縄文式の小土器片が九片出土している。

第九號址（七図、第五図版第一図）

長径一米二二糎、短径一米四七糎の範囲内に配石された本遺構は発掘前には約二五糎内外の黒褐

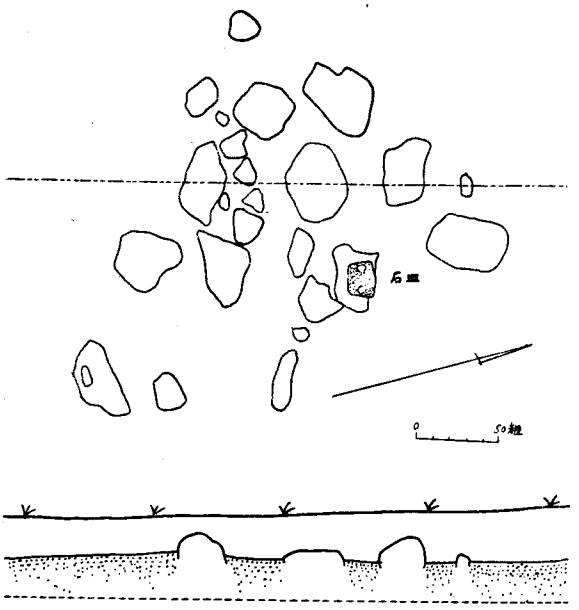
色土層をかぶつていた。遺構は三〇糎乃至一五糎大の川原石で構成され、形状は略東南端部に発掘面より（茶褐色土層面）二〇糎の高さの立石（自体の長さ五二糎、最大巾二〇糎）があり、この立石を囲むような状態で、略三列に西北に延びて配石されている。

これは第一次調査の際に調査した第一号址と類似する例である。

又遺構下部の竪坑の存在をたしかめるため、立石を取り除いて調査したが確認することはできなかつた。

第一〇號址（第八図、第五図版第二図）

本遺構は第一層の黒褐色土層下三〇糎内外の深さの茶褐色土層面に、長径二米六〇糎、短径二米二〇糎の範囲に径四〇糎乃至二〇糎内外の川原石を使用して配石された遺構であるが、本遺構もまた過去において耕作などで一部の石が堀り取られなどして、かなりの破壊を受けているものの如くで、配石当時の原形をとどめていないように思われる。



第八図　第10号址実測図

又本遺構では川原石の中に混じつて巾二〇糎ほどの半分にわれた石皿が川原石にのつて臥せられた状態で出土したが、この石皿は裏面に低い足を二個もつているので、完形ですれば対に二個づつある、縄文文化中期以降に普通に見られるものであるが、遺構を構成する川原石に混じて、他の石と同一用途に用いられていることは注意すべきであろう。

なお本遺構の川原石の間からも形式不明の縄文式の小土器が二片出土した。

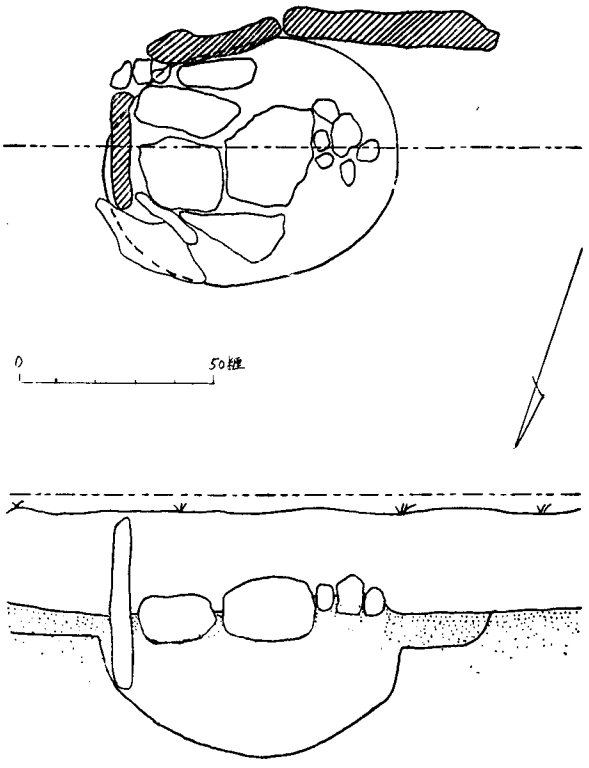
第一一號址（第九図、第五図版第三図、第六図版第一図）

本遺構は第一層黒褐色土層に二〇糎内外おゝわれ、第二層茶褐色土層の上面に配石されていたことは、他の各号址と同じであつた。

尙本遺構は長径一米、短径七〇糎の範囲に、東端に石皿を長軸を縦位にして立て、これを中心として南側へ長径三三糎と五三糎の二個の扁平な川原石を長軸を横にして垣の如く立て竝べ、石皿の北側にもやゝ扁平な川原石が長軸を横にして一個縦に配石されていた。この石皿を中心とした縦位の列石の内部は径二〇糎内外の川原石が長軸を東西の方向にとり、略南北に二列に敷き竝べて配石されていた。

尙西端部の川原石は風化したためか著しくづれていた。

本遺構は小さいながら整然とまとまつており、遺構が作られた後、殆ど今日まで破壊を受けなかつたように思われるものである。ただ石皿は立石であつたため、その頭部は地表下数糎の深さにあり、往時の耕作の際などに、その鍬先が石皿上面に何度かあたつた模様で、その上面には鍬のきず痕と思われるものがかなり認められ、又そのために破損したもの石皿は三つにわれていた。



第九図　第11号址実測図

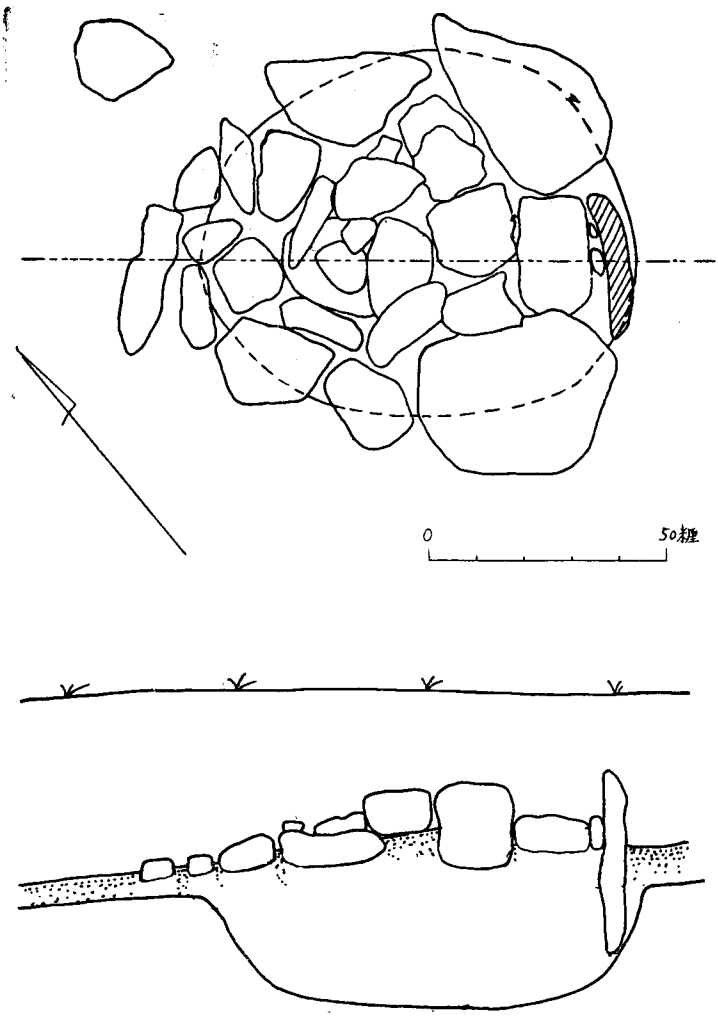
この石皿は長径四〇糎、短径二三糎ほどの不整五角形で、石皿の表面には縁があり、縁の一ヶ所は切れて、その部位が突出し片口をなしていた。埋没時にはこの片口のある側が下になつていた。又石皿の中央部はかなりに磨滅しており、相当長期間使用した後、この石造遺構の配石に利用したものと思われる。（第七図版右写真）

又この遺構の下には、東西径七五糎、南北径六〇糎、深さ四〇糎の竪坑が発見されたが、この穴は遺構の大きさに匹敵するものであつて、前記各遺構の竪坑に類似するものであるが、竪坑の底面は中心部に向つて深くなつていた。竪坑内には茶褐色の撹乱された土壌がつまつていて、木炭末が微量認められた外、他に何物も出土しなかつた。

遺構の石組の間からは、形式不明の縄文式小土器片が二片出土した。

第一二號址（第一〇図、第六図版第二図、同第三図）

本遺構は第一層黒褐色土層に三〇糎内外おゝわれ、第二層茶褐色土層上面を底面として配石されていることは他と同様で、長径一米一五糎、短径九五糎の範囲内の略南東部に、石皿を長軸を縦にして立て、石皿の両側に各々長軸を北、西に向けて、長径略四五糎と四〇糎大の川原石が対称的に配石され、石皿の前面には長径二五糎の扁平な長方形の川原石が長辺を石皿と平行に、それより北西前面の川原石よりは一段と低く配石されていた。



第十図　第12号址実測図

又前記の石皿の両側の比較的大きな川原石に囲まれたような形で、北西には径二〇糎乃至一〇糎大の川原石が積まれたような状態に敷き並べられていた。

本遺構に配石されていた石皿は極めて形の整つたもので（第七図版左写真参照）長径五〇糎、短径三〇糎の略長方形のもので、表面は四周に縁がとられており、中央部は長楕円形に一段と凹んでおり、凹部はかなりに磨滅し、相当使用されたことを物語つている。裏面には円形の低い四つ

足があり、この両側の四つ足と四隅を結んで、長辺の両隅より対称的に中心部へ向つて孤状に隆線が浮彫されていた。この石皿も第一一号址の石皿同様、往時の開墾などの際に鍬先でもあたつたものか上縁が破壊され、四つに割れが入つたまゝ立つていた。

又この遺構下には長径九〇糎、短径七五糎、深さ二八糎の不整円形の竪坑があつた。竪坑中には攪乱された茶褐色土層が堆積していたのみで、他に何物も出土しなかつた。

又石組中に一片、遺構外に一片、形式不明の縄文式小土器片が出土した。

第一三號址（第一一図、第八図版第一図）

本遺構は三五糎ほどの黒褐色土層をかぶり、長径一米四五糎、短径九五糎の範囲内のほぼ中央に発掘面から三〇糎の高さをもつ立石（自体の長さは六〇糎、最大巾二五糎）が南に傾斜して立つていた。この立石を略中央にして、南北の方向に径三五糎乃至二〇糎大の川原石が二列に配石されていた。

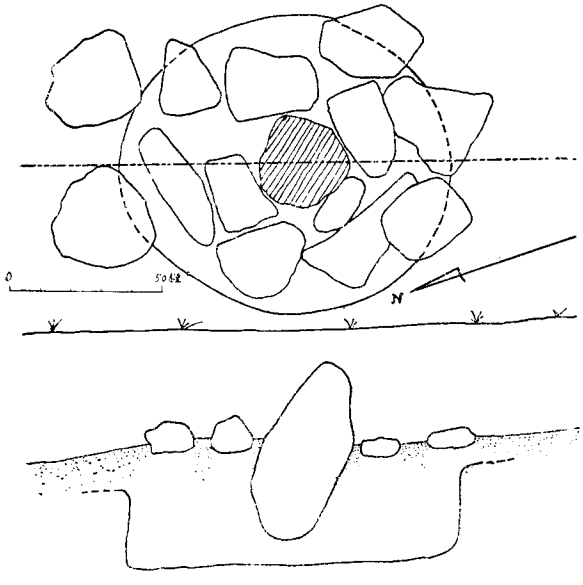
この遺構下には長径一米一〇糎、短径九七糎、深さ二五糎内外の不整円形の竪坑があり、竪坑内には他の竪坑と同様に攪乱された茶褐色の土壌がつまつており、大木9式かと思われる磨消縄文ある胴部土器片が三片出土した。

又本遺構も配石後、開墾、耕作などによつて後世破壊をうけたような痕跡が殆ど認められない例である。立石の傾斜は周囲の根締め石の弱かつたためではないかと思われる。

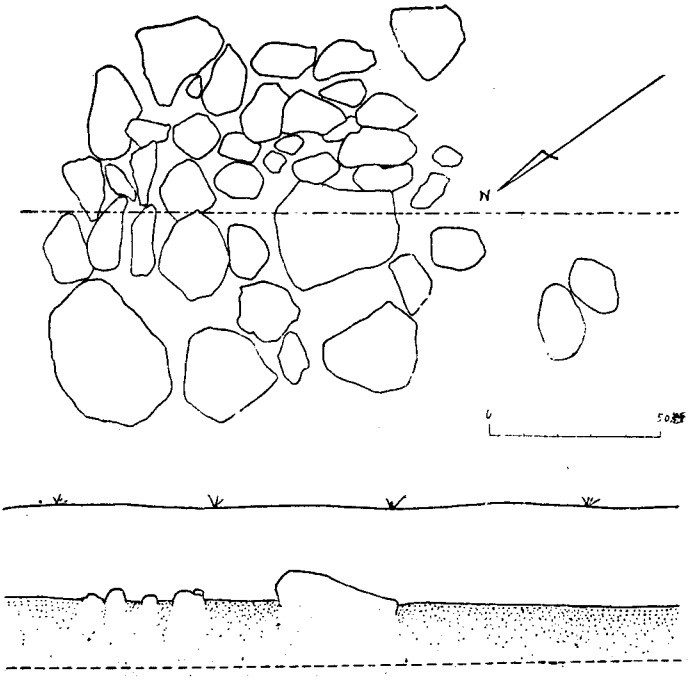
第一四號址（第一二図、第八図版第二図）

本遺構は径四〇糎乃至二〇糎程度の川原石を略径一米の正方形に外周に配列し、内部には径二五糎より十糎未満の小形な川原石を雑然と敷き並べた如く配石したもので、発掘前には第一層の黒褐色土層を二七糎ほど上面にかぶつていた。

又遺構下の調査を行うため中央部の配石をとり除いて試掘してみた



第十一図　第13号址実測図



第十二図　第14号址実測図

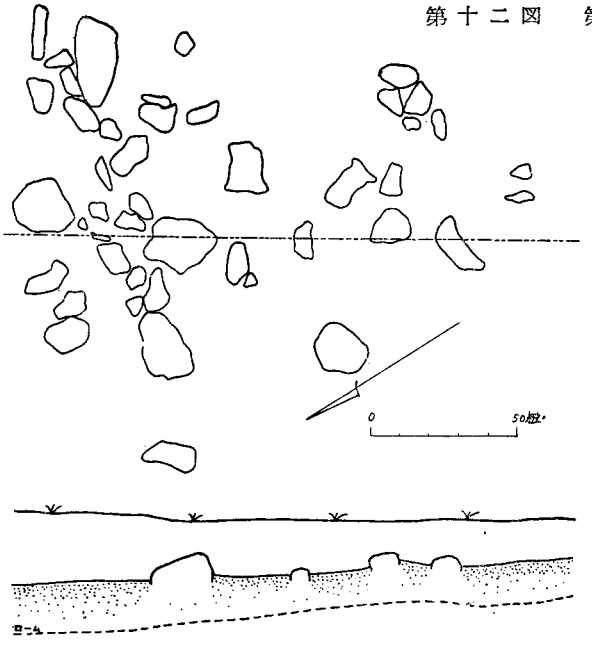
なつたものと思われる。又ほゞ中央附近に数ヶ所径三〇糎、深さ三〇糎のピットを掘つたのであるが、竪坑の有無を判然とさせることはできなかつた。

第一六號址（第一四図、第九図版第一図）

約三〇糎の厚さに第一層である黒褐色土層をかぶつている本遺構は、長径三米五〇糎、短径二米一五糎の範囲内に第一五号のであつたが、遂に竪坑らしい施設の存在は認められなかつた。

第一五號址（第一三図、第八図版第三図）

二〇糎ほどの黒褐色土層をかぶつている本遺構は長径一米八〇糎、短径一米五〇糎の範囲に、三五糎乃至一〇糎内外の川原石を不規則に散在させているが、意識的にこのように配石したものか、開墾の鍬にかゝつたものか今となつては知るよしもないが、恐らくは破壊されて、このように



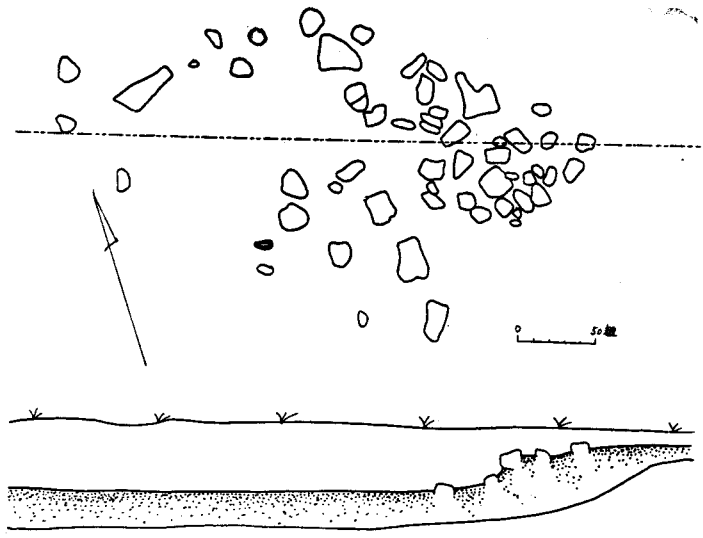
第十三図　第15号址実測図

址同様、二五糎乃至一〇糎内外の川原石が散在して、いづれが中心であるかも判然としないもので、後世の開墾などのおりに徹底的に破壊されてしまつたものであろうと思われる。

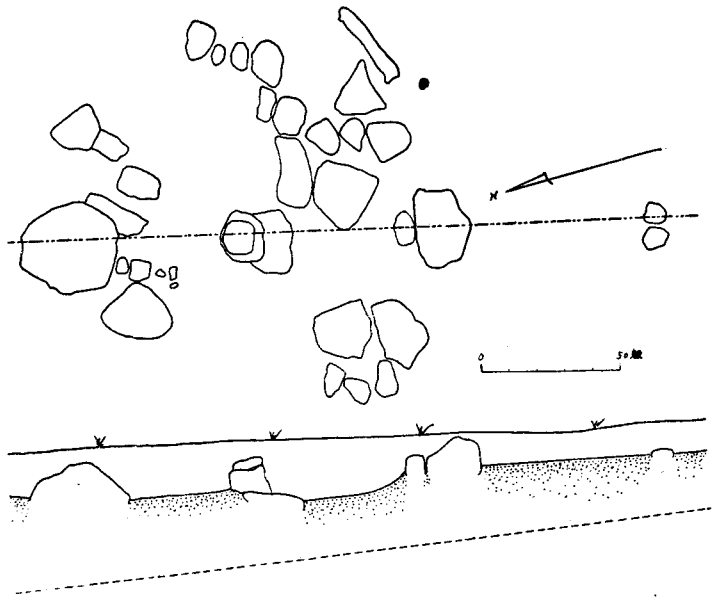
又この遺構略中央部の配石面、第二層直上で形式不明の小土器片五片が出土した。

第一七號址（第一五図、第九図版第二図）

本遺構は二〇糎内外の黒褐色土層をかぶつており、南側においてやゝ原形をとゞめているように思われるものである。即ちほゞ



第十四図　第16号址実測図

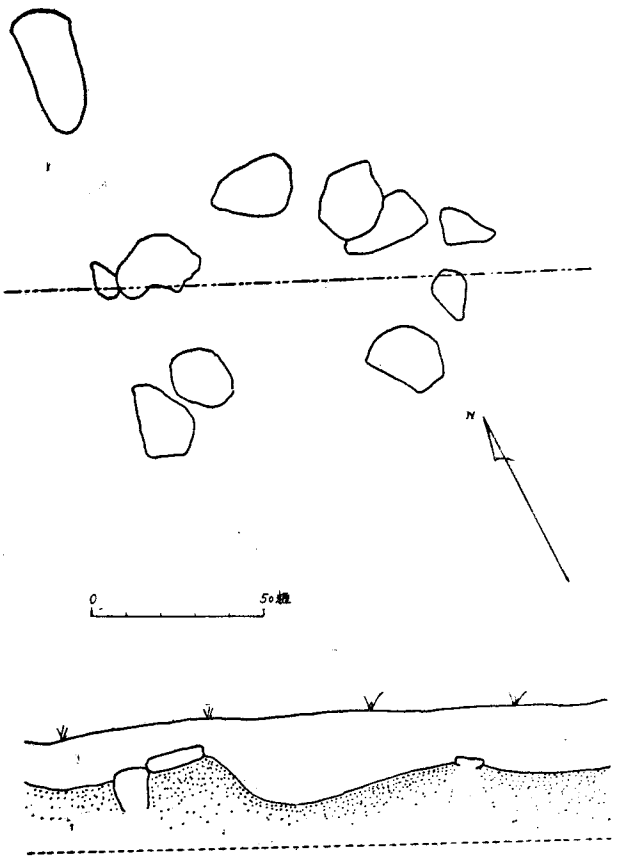


第十五図　第17号址実測図

半円をえがくように径二〇糎内外の川原石を配石し、又一部に二重に組んでつまれたような個所が認められた。又北部には約径三五糎の大形な川原石があり、この周囲には小さな川原石が浮いたような状態で乱雑におかれているところより見て、後世破壊を受け、抜き取られたものもあり、又この小石はかなりに動いたものと思われる。本遺構の構造は破壊を受ける以前には第八号址に類似する形のものであつたろうと思われる。現遺構の大きさは長径一米六〇糎、短径一米四〇糎で、遺構下に竪坑の所在を調査したが判然としなかつた。

第一八號址（第一六図、第九図版第三図）

第一層の黒褐色土層に二〇糎ほどおゝわれている本遺構は、径二〇糎内外の川原石を直径約一米の円形に一列に配石したものであるが、円形に配石された南側の一部は後世抜き取られたものか、石が欠除していた。



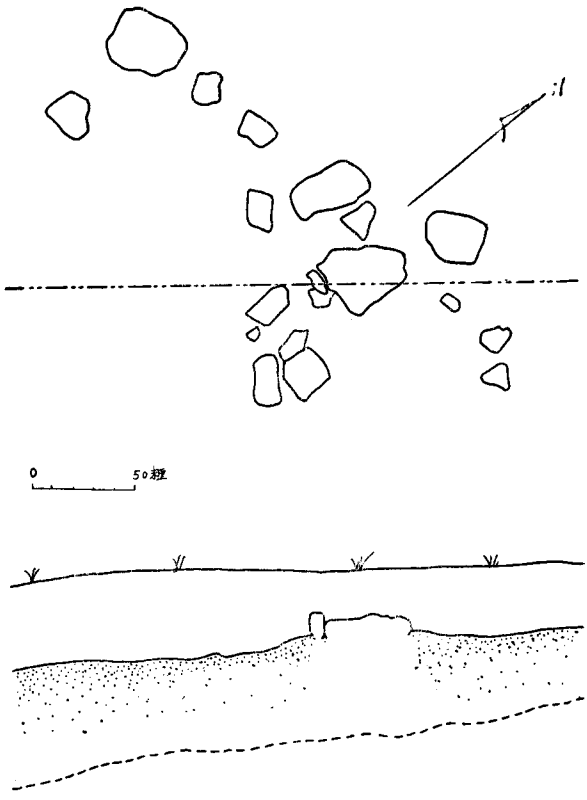
第十六図　第18号址測図

川原石によつて囲まれた内部は第二層の茶褐色土層の上面が僅かに凹んでいることが注意されたが、これが人為的なものであるか、自然のものであるかは判然としなかつた。

又遺構下に竪坑の所在を調査したが遂に発見し得なかつた。

第一九號址（第一七図）

第一八号址に接し、第一八号址類似の構造のものであつたようにも思われるが後世の破壊が甚しく、明確な原形を把握することは不可能であつた。現在の石が散在する



第十七図　第19号址実測図

範囲は東西径二米六〇糎、南北径一米四〇糎であつた。

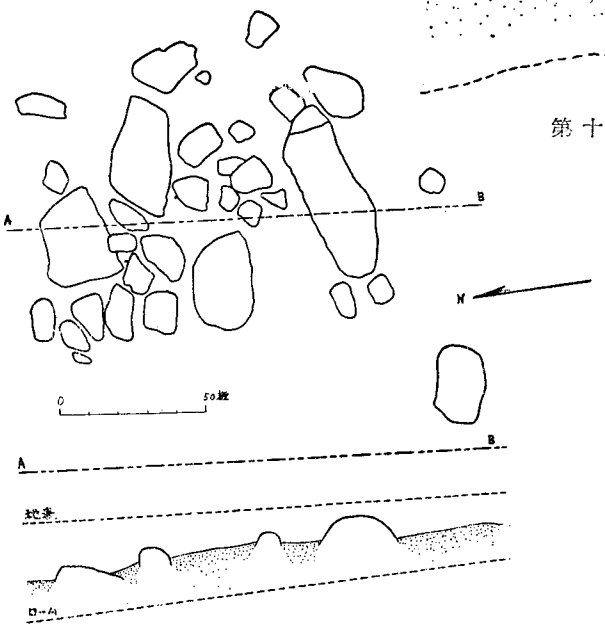
第二〇號址　（第一八図、第一〇図版第一図）

本遺構は第一層の黒褐色土層に一五糎内外おゝわれており、この遺構の南端部には長さ六〇糎、巾二〇糎ほどの柱状の安山岩質の川原石が、略東西の方向に横たわり、その北側には一米平方の範囲内に径約四〇糎大の川原石から一〇糎未満の小石までを使用し、雑然と散りばめた如き状態に置かれていた。又南端部の柱状の川原石は、東側の一端に割れが入つており、これは開墾などの際に鍬先にかゝつたゝめとも考えられ、又この石は東端部より西端部へ傾斜して埋没しており、配石当時は東端部を上にして立つていたものと思われるものである。

又遺構下に竪坑の有無を調査したのであつたが、遂に本遺構下にはその痕跡を発見できなかつた。

第二一號址　（第一九、二〇図、第一〇図版第二図）

本遺構は第一層の黒褐色土層に約二五糎おゝわれており、長

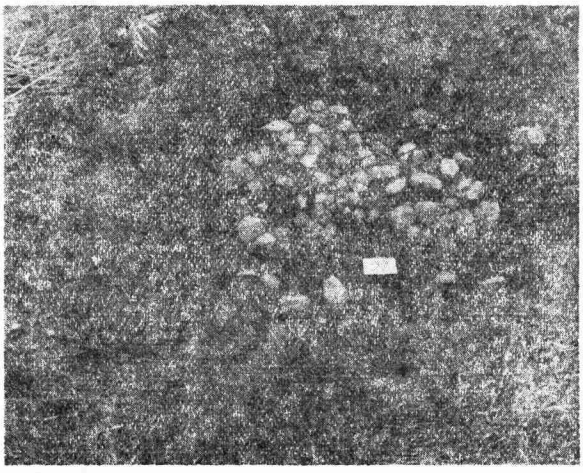


第十八図　第20号址実測図

第十九図　第21号址実測図

径二米九〇糎、短径二米六〇糎の範囲内に配石があり、略東西方向より中央部の両側が石が欠除して、ひさご形をなしている。本遺構に使用された川原石は径三〇糎乃至一〇糎内外の石で、石はかなり密接して、つめ合せた如く配石されていた。

本遺構は造営後に人為的な変貌を見なかつたものと思われる。又ひさご形の配石を取りかこむように点在する川原石は本遺構に一連の関連をもつものであろうか。遺構下に竪坑の有無を調べたが判然としなかつた。

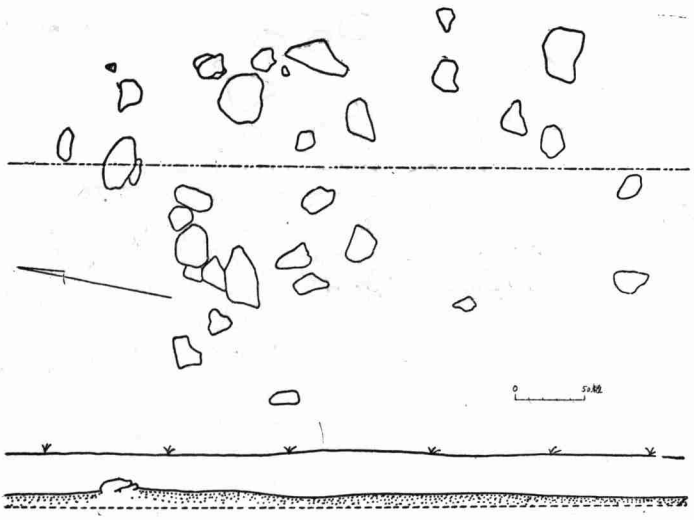


第二十図　櫓上より撮影の第21号址

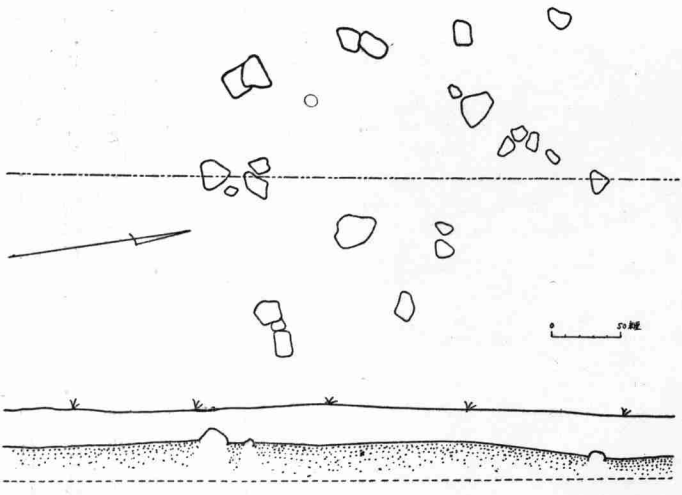
第二二號址（第二一図、第一〇図版第三図）

本遺構は第一層の黒褐色土層に二五糎内外おゝわれており、遺構の範囲はかなり大きく、長径四米二五糎、短径二米六五糎あり、この範囲内に不規則に大小の石が散在している遺構で、後世の開墾、耕作などの時に徹底的に破壊をうけたものであろうと思われる。

第二層表面の除土作業中形式不明の縄文式小土器片が四片出土した。



第二十一図　第22号址実測図



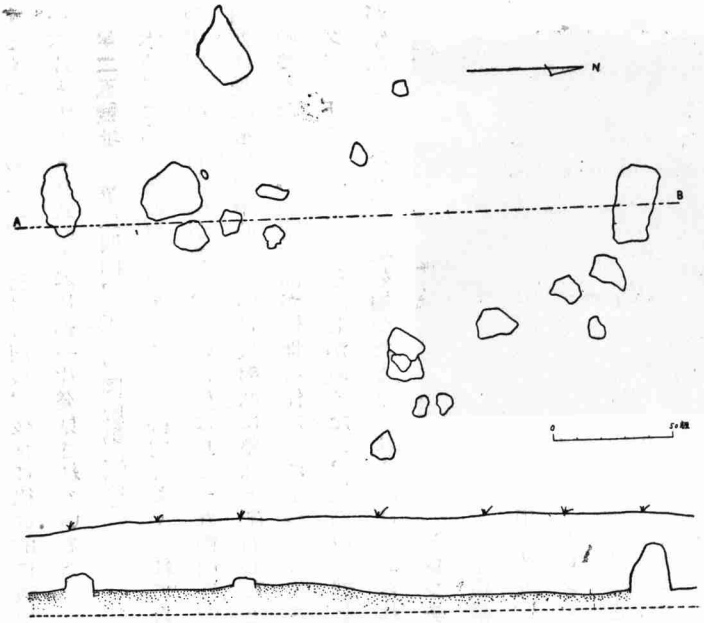
第二十二図　第23号址実測図

第二三號址（第二二図）

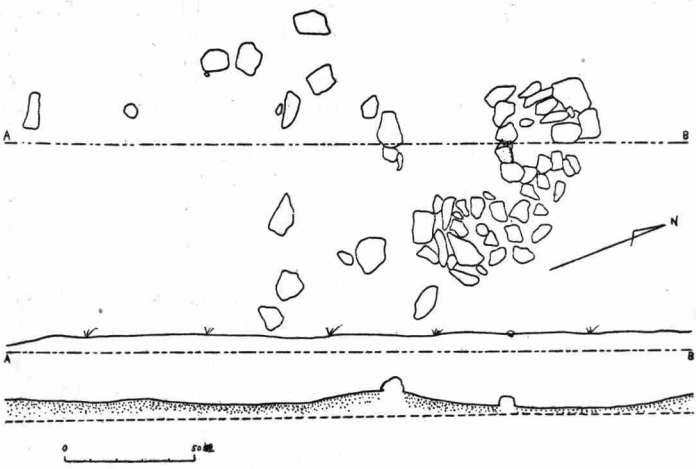
本遺構は長径二米九〇糎、短径二米三〇糎の範囲内に第二二号址同様、大小の川原石が不規則に散在する遺構で、黒褐色土層下二〇糎糎内外の深さに埋没されにいた。本遺構も亦、後世の破壊を受けたものと思われる。第二層上面、配石面で形式不明の縄文式土器片二三片と、大木8b式の土器片が一片出土した。

第二四號址（第二三図）

本遺構は第一層の黒褐色土層に三五糎内外おゝわれており、長径二米五五糎、短径一米九〇糎の範囲内に川原石が不規則に散在



第二十三図　第24号址実測図



第二十四図　第25号址実測図

するもので、第二二、二三号址同様、後世に徹底的に破壊を受けたと思われるものである。遺構内より形式不明の繩文式土器片、一六片と大木8b式の土器片が一片発見されている。

第二五號址（第二四図、第一一図版第一図）

木遺構は第一層の黒褐色土層に二五糎内外おゝわれており、長径二米二〇糎、長径一米二五糎の範囲内の北側には直径約九十糎の半円形の組石遺構があり、この遺構は長さ一五糎内外の比較的細長い川原石を、石の長軸を利用し外周に半円形に配石し、その内側は長軸を円の中心部に向け放射状に整然と配石したと思われるものである。その南西部は川原石が雑然と廣範囲に散在し、北側の整然たる遺構の南半部が後世耕作などによつて破壊された際に、飛散して地中に残つたものではないかと思われる。

又遺構下に竪坑の所在をたしかめるため、組石の一部をとり除いて、その中心部と思われる地域を発掘してみたが、地層の層序が整然としており、竪坑を掘つたと思われる跡は認められなかつた。

トレンチ（第二五図）

石造遺構群の中心地と思われる地域に、ほゞ東北より西南の方向に長さ三六米、巾一米五〇糎のトレンチを発掘した。

トレンチの東北部において、小石が若干散在しているところがあつたが、石造遺構の破壊されたものであるかどうか、確認し得なかつた。

トレンチ内の地層の層序は第一層の黒褐色土層が二五糎乃至三五糎あり、第二層の茶褐色土層は二〇糎乃至二五糎あり、以下は黄褐色ローム層となつていた。

（以上江坂輝彌、菊池啓次郎記）

第二十五図　西南部よりトレンチ全景

住居址

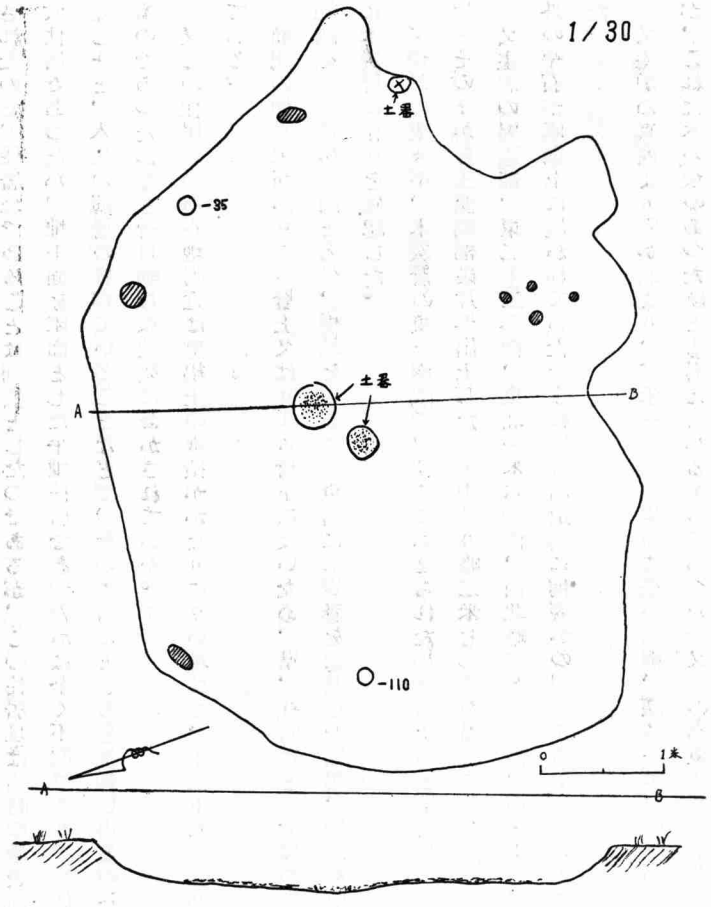
本遺跡は石造遺構群地域の東方約一五〇米、石造遺構群地域より台上の高位置にあり、遺跡は台上畑地より、彌五郎堤のある谷に向つての北斜面にのびている。

調査日誌にも記した如く、昭和二七年四月五日、台上畑地の北斜面に近い、繩文式文化中期の土器片が多量に散布している地域を選び、東南部より西北部に向つ

て、長さ五〇米、巾一米五〇糎のトレンチを発掘した。トレンチ内からは第一二図版第三図に示した如き縄文式文化中期の大木7a式より大木9式に至る間の各形式の土器片が夥しく出土し、この外安山岩質の岩石で作られた短冊形の打製石斧などが出土した。

又同日午後、トレンチ西北部で黒褐色土層中に黒褐色土層を踏みかためた、住居址の床面らしき場所を発見する。

二六日は午後、雨中を昨日に引続き、この住居址らしき地域を調査、口縁と底部を欠いた径三九糎の大木9式深鉢形土器を炉縁とした炉址を発見、この炉址の周辺半径約一米内外の廣さに、大体炉縁の高さに厚さ三糎内外の薄い木炭層があり、その下の黒褐色土層が踏みかためられていることが判明した。火災を起して廃棄された住居址であろうか。午後三時頃より降雨はげしくなり、炉址を撮影、本格的調査は夏休以降に延期とし、一応調査を中止する。



第二十六図　住居址実測図

八月一八日、ふたたびこの住居址を発掘、二六図の住居址、平面図に示したようなプランを明らかにすることができた。

この住居址は地表面下約三〇糎の黒土層中にあり、黒褐色土層がかたく踏みかためられており、その上に木片などの燃え残りの炭化物の薄層があり、この面に厚さ六糎、径三〇糎内外の平石や、復原可能土器、炉址などが発見

されたので、住居址であることは判然としたのであるが、この住居址は当時の地表面より若干堀り下げたところに床面を設けた竪穴住居であつたか、地平面を床面とした平地住居であつたかは全く不明であり、又住居址の範囲なども床面が踏みかためられていることと、木炭の薄層の延びていることなどで、その大略のところを推知し得るのみで、平面形が円形のものであつたか、方形のものであつたかなど皆目判らぬ状態におかされていた。

又この住居址の所在地附近は黒褐土の堆積がかなりに厚い地域で、床面下五〇糎乃至七〇糎の黒褐土層を経て茶褐色土層となつている。

前記の如く床面がローム層上又はローム層下にないため、壁、柱穴などの遺構の確認は不可能であつたが、木炭末の薄層の所在範囲を大略住居址内と考へ、炉址を中心に略東西に木炭層を追及した結果、炉址を中心に、東々北から西々南へ五米三〇糎の範囲に木炭層の存在を確認した。

又炉址の東々南、木炭層の東々南隅で、逆さにふせられた小鉢形土器とキヤリパ形深鉢土器などが出土（第一二図版第一図参照）その下から土偶胴部破片が出土した。主炉より略二米七〇糎の場所であつた。

又主炉の周辺部、東二米三〇糎、東北一米六〇糎、西北略二米三〇糎、南々東略二米の場所に前記した径約三〇糎、厚さ六糎内外の平石が床面上に置かれていた。これは住居遺構に何等かの関係するものと考える。尚南々東のものは小さなものが四個であつた。

又主炉の真西より僅か北より、二米一〇糎の場所に径一〇糎、深さ一米一〇糎の土が柔かい、真直な穴らしきものを発見したが、これは木の根のあつた跡とも考えられるものであつた。又炉の真東より僅か北にふれた一米九〇糎のところに径一八糎、深さ三五糎の同様な穴らしきものを発見したが、この穴らしきものの中からは小石と土器片が発掘された。これらの穴はボーリング棒で茶褐色土層までの深さを調査中に良くさゝる土の柔かな部分として気附いたものである。

又第一一図版第二図に示した住居址全景写真撮影後、主炉の炉縁に使用された土器を堀り上げようと、主炉周辺の木炭層を発掘中、主炉の西側に口縁と底部を欠いた径略二〇糎の深鉢形土器を炉縁に使用した副炉が発見された。（第一一図版第三図参照）尚主炉では灰、焼土の層が七糎ほどあつたが、副炉では数糎であり、副炉の炉縁は主炉の炉縁より数糎低かつたため、最初に発見することができなかつた。主炉と副炉との間は約二〇糎離れている。副炉に使用された土器も磨消文のある大木9式の土器であつ

た。又この両土器は炉縁に使用されていたため、火力によつて脆くなつていて、堀りあげの際に粉々にくづれてしまつた部分もあつた。又この床面上及び上部の黒褐色土層からは大木8a、8b式の土器片が最も多量に認められ、床面下には大木7a、7b式の土器が認められた。（江坂輝彌記）

遺　物

一、石造遺構群出土の文化遺物

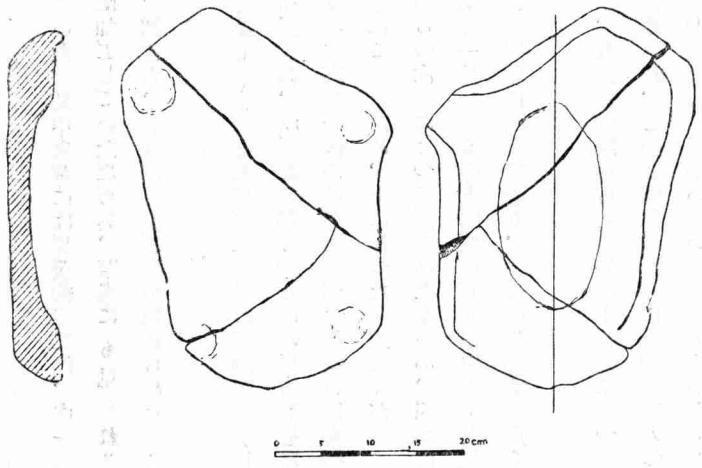
石造遺構群の各組石の間、遺構下の竪坑内などからは、第一一号址、第一二号址に使用されていた石皿の外、特に注目すべき文化遺物の発見は見なかつた。

土器は縄文式文化中期の斜縄文のみの認められる小破片が、各石造遺構址の組石の間や、竪坑内から発見されているが、形式を判別し得るような比較的大形な破片や、口縁部の破片は極めて少なかつた。

形式の判明した土器片は第一三号址の石組下と竪坑内より発見された、大木9式のものと思われる磨消縄文ある深鉢形土器の胴部破片、第二三号址、第二四号址をとり発見の大木8b式の土器片のみである。

石器は第四号址の基石状積石内に混在していた安山岩質の岩石で作られた短冊形の打製石斧一と、第一〇号址の川原石の上にのつて発見された巾約二〇糎の足附の安山岩製石皿の半欠のもの、及び第一一号址、第一二号址発見の石皿である。

第一一号址発見の石皿は第七図版の右及び第二七図の実測図に示した如く、五角形の一片に片口を附した、類品の極めて稀な石皿で、長径四〇糎、短径二三糎厚さ最厚部で約五糎あり、表面には周辺に巾約二糎、高さ一糎の縁があり、五角形の底辺部をなす側が上面となつて組石中に立てられていたため、底辺部は過去

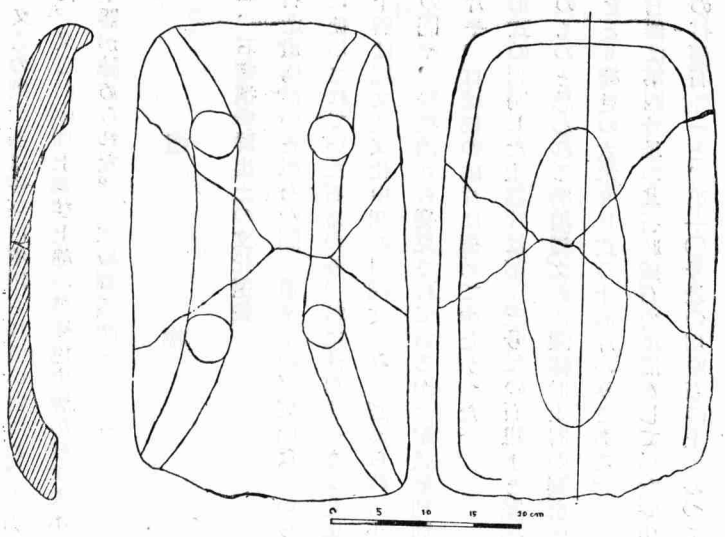


第二十七図　第11号址発見の片口附石皿

において鍬先などによつて縁が破壊されていた。

又この石皿は鍬先などが底辺部に衝撃をあたえた際、破損したものか三個に割れていた。又中央部には長径約二二糎、巾一二糎深さ二・五糎の長楕円形の凹みがあり、この部分で磨石などを使用し、目的物を常に加工していたためか、写真にも見られる如く、この部分が最も良く研磨されている。又裏面は平坦であるが四隅に径四糎内外、高さ六、七粍の円形の脚が認められた。この石皿の石質は安山岩のように思われた。

第二十八図　第12号址発見石皿



第一二号址発見の石皿は第七図版の左及び第二八図の実測図に示したもので、長径五〇糎、短径三〇糎、厚さ最大部で約五糎の長方形をなし表面の周辺には巾約二・五糎、高さ一糎の縁があるが、この石皿も第一二号址の立石として使用されていたため、上になつた一辺は縁が壊されていた。又この石皿もこの時の衝撃によつて割られたものか、四つに割れていた。又この石皿も第一一号址のものと同様に石皿の中央部が長径三〇糎余、深さ約六糎の長楕円形に凹んでおり、この部分が最も良く研磨されていた。

又裏面は平坦であつたが、長辺の両隅から対称的に中心部に向つて巾四糎内外の弧状の隆線が浮彫され、この隆線状の四点に径約四糎大の円形の脚が隆線より更に六、七粍隆起して附いていた。なおこの石皿の石質は深成岩で斑糲岩質のものではないかと思われた。（江坂輝彌記）

二、住居地区出土の遺物

イ、自然遺物　住居址床面の木炭層出土の炭化物を直良信夫氏に鑑別をお願いしたところ、くり、くぬぎ、なら、とちの実などがあつたとのことで、これは食用にしたものかとも考えられる。

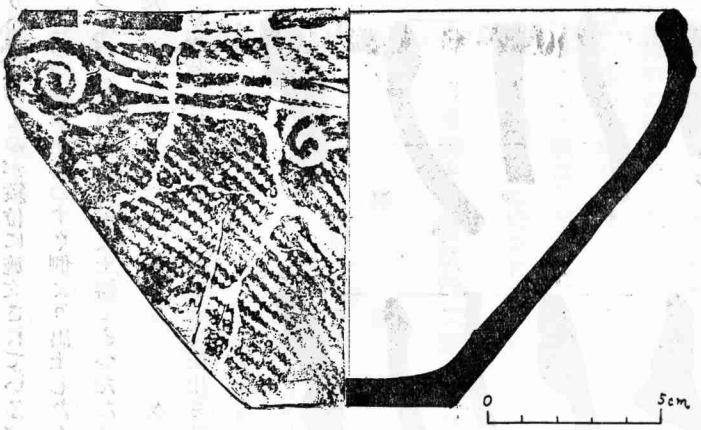
ロ、文化遺物　この聚落地区の畑面には、縄文式文化の中期の土器片

が夥しく散布しており、短冊形の打製石斧、チャート製の無柄石鏃、頁岩製の横型石小刀、石皿などが表面採集されている。

第一二図版第三図に示した土器片はトレンチ内より出土した夥しい土器片中より選び出した口縁部破片の一部であり、この土器の口縁部断面器形は第三〇図に示した如くである。（断面図番号は写真番号と同じもの）

写真に見られる如く小破片のため、大きさは不明確であるが、口径五〇糎内外のものもあるようである。

木遺跡地の土壌が悪いためか、土器の粘土質が悪いためか、文様面の一部が剝脱しているものがかなりある。しかし焼成はかなり良好で、見かけほど脆弱な土器ではない。土質は石英、長石粒など含み、粗いものと、こまかいものがある。色調は一般的に灰褐色乃至は暗灰褐色のものが多かつた。



第二十九図　住居址出土大木7b式鉢形土器実測図

写真1、2は大木8b式の深鉢形土器の破片、3は大木9式の同じく深鉢形土器の破片、4は大木7b式ではなかろうか、5は大木8a式、6は8b式の深鉢形土器、7は大木7b式であろうか、8は大木7a式であろうか、9、10、11、13は大木8a式、12は7a式、14、15は8b式、16は8a式、17は大木7b式であろうか。大体以上に示した如く、このトレンチよりは大木8a又は8b式の土器片が多く、これに大木9式、7a、7b式と思われる土器片が若干発見されている。

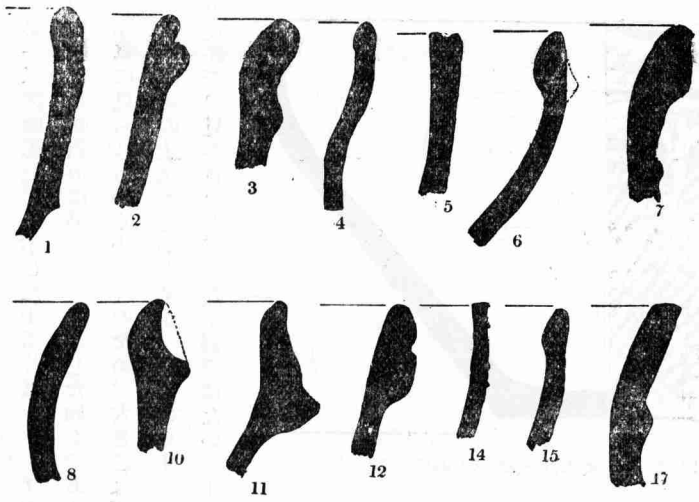
又住居址の床面からは主炉と副炉にされた大木9式かと思われる深鉢形土器と住居址の東辺部で発掘された大木8b式と思われる小浅鉢形土器（第一二図版第二図、第二九図参照）と同形式の小形キャリパ形深鉢土器及び土偶胴部破片（第一二図版第四図、第三一図参照）などが出土した。

大木8b式かと思われる浅鉢形土器は、口径一八・八糎、底径六糎、高さ一一・五糎であり、口頸部の隆起線渦巻文などの両側には撚糸文が施文されており、一見撚糸文による沈線文の渦巻文などが主体をなす文様のように思われるもので、大木8b式には一般に見られぬ施文法であるように思われる。又縄文は右撚

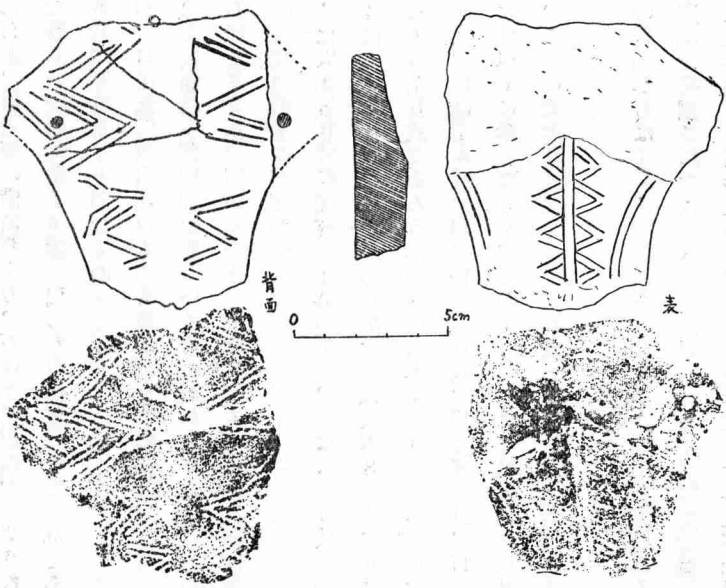
りの原体のものが縦位に施文されている。色調は灰褐色で、焼成は良好なものであった。

この浅鉢形土器のすぐ側より出土したキャリツパ形の土器は高さ二〇糎未満の小形土器で、口頸部に浮線文の装飾あるものであつたが、灰白色の脆弱な土器であつたため、取上げる際には大部分がくづれてしまい、復原し得なかつたことは実に残念であつた。

又底部と口縁部を欠いた炉縁に使用された土器は、何の手違いか司東真雄氏より今日まで、江坂の手許に到着せず、復原するこ



第三十図　土器片断図



第三一図　土偶拓影実測図

ともできず、ここに紹介し得なかつたことは甚だ遺憾に思う次第である。

又前記の浅鉢形土器などの下から発見された土偶は層位的に見れば床面下より出土したものである。第一二図版第四図、第三一図に図示した如く、頭部、胴下半部、腕部先端を欠失するもので、中期に一般的な土版状の扁平土偶です。

現存部高さ九糎、最大巾八糎七粍、厚さ一糎六粍であり、正面は胸部上半が欠損しており、乳房の有無など不明である。又右側の腕部の基部に直径四粍の貫通孔があり、左腕の基部にも対称的にあつたように思われる。又上縁首部の折損部中央にも同様の円孔あり、この土偶はこれら三個の穴に紐を通し懸垂されたものかとも思われる。

正面には中央に一本の半割竹篦による平行線を胸部に縦に真直ぐ引き、その両側に同じ施文具によつて鋸歯状文を施文し、両側にも体形に沿つて、同じ施文具で弧状の沈線を施文している。衣服を示しているものであろうか。又背面には両側に向つて不規則な鋸歯状の文様を施文している。この土偶は一見脆弱のように見えるが、焼成も比較的良好で、黄褐色をしている。

なおこの土偶は住居址には関連なく、床面下の文化層のもので、大木7a式のものかと考える。而して住居址は大木8b式より9式への過渡的な時期に営まれたものではないかと考える。（江坂輝彌記）

石造遺構下、竪坑内土壌の燐分析

緒　言

日本の石器時代遺跡から人骨や獣骨の類が発見されるのは、概ね貝塚に限られるといつて過言でない。これは日本の土壌の大部分が酸性を呈するため、例え当時こゝに人骨や獣骨が埋存したにしても、長年月の間に化学的変化を蒙つて、やがて溶解消滅したと見做される場合が少くないと考えられるのである。貝塚に骨類がよく保存されているのは、多量の貝殻が集積された結果、貝殻を構成する炭酸カルシウムの存在によつて、其処の土壌が局所的にアルカリ性を呈しているからである。従つて、貝塚以外の遺物の発掘に際して、一片の骨類断片すら発見されないとしても、其処に曾つてその種遺残が埋存しなかつたと断定することは出来ないのである。土中に埋められた人体或いは動物体はやがて分解され、その化学成分は土中に滲透する雨水や地下水によつて漸次運び去られてしまうのであるが、特に骨類を構成する重要な化学成分である燐は、土中の他の成分、例えば鉄、攀土等と共に極めて溶け難い化合物を形成して、他の成分のように容易に流亡せず、長く土中に停滞する性質をもつている。燐は動物体のみならず、

植物体にも僅かではあるが必ず含まれているので、植物遺体やその分解物を多量に含む腐植土中には、やはり可成り多量の燐が検出され、植生のみられる一般の土壌では、表土に近い部分に最も燐量が多く、垂直的に土中の深い部分になるにつれて、燐量は次第に減少しているのが普通である。従つて、このような土中に於ける燐分の自然堆積の状態が、局所的に攪乱され、特にそこに多量の燐が検出される場合には、何等かの特別の原因があるのであり、殊に遺跡に於いては、人為による燐分の集積を考慮せざるを得ないのである。

樺山遺跡については、石造遺構の性質を考察する上に、特にその遺構下から発見された竪坑が果して墓坑であるか否かを、実証的根拠に基いて確認することが甚だ望ましいのである。処が、同処からは骨類遺残は一切発見されないので、原形を止めている物的遺残によつて直接にこの点を実証することは出来ないのである。そこで、若し問題の竪坑が事実墓坑であるとするならば、上述の原理によつて、竪坑内の土には或いは多量の燐が検出されることを期待出来るのである。曾つて、秋田県大湯町或いは北海道余市附近の同種遺構について行つた同種検査の結果は、遺構下の竪坑内に顕著な燐の集積の認められるものがあつた。その燐量が遺跡近傍の自然堆積土層に於ける燐量を遙かに凌駕する事実は、その燐の集積を人為に帰するに充分な根拠を與えるものであり、その燐の由来に関して、或いは曾つてこゝに人体遺骸が埋存したであろうとする考えを有利に導くのである。このような実例に鑑み、樺山遺跡の石造遺構についても、特に遺構下から発見された竪坑内の土の試料、並びに比較のため穴周辺の土の試料について、それらの燐含有量を測定し、比較考察することが有用であると考えられたのである。

試料並びに測定方法

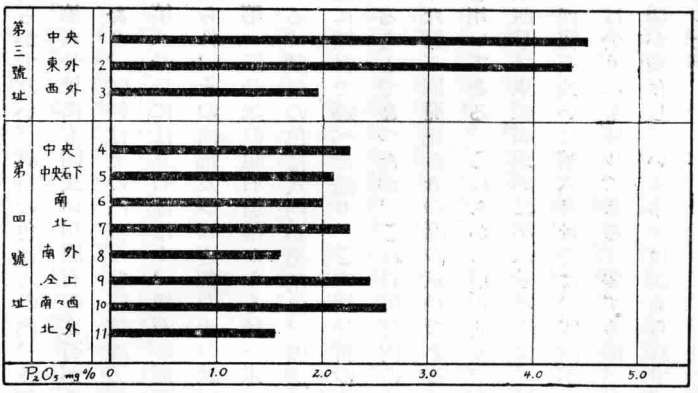
土の試料はすべて江坂輝彌氏によつて提供されたものである。

昭和廿六年十一月第一回発掘調査の際、第三号址（三個）及び第四号址（八個）から採取されたもの十一個、並びに昭和廿七年三月第二回発掘調査の際、第四号址（七個）、第六号址（三個）、第八号址（二個）及び第十三号址（三個）から採取されたもの十五個、合計二十六個より成る。個々の試料については次章で触れることにした。

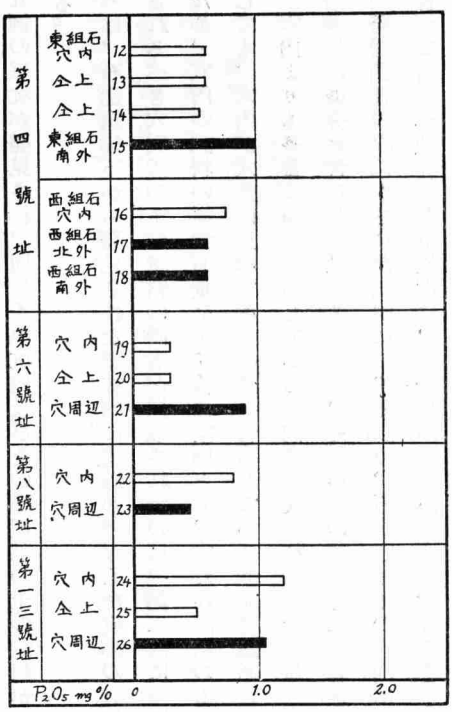
燐含有量の測定には、農学で用いる有効燐酸定量法に従い、試料に一%枸橼酸溶液を加えて振盪したとき溶出する燐量を比色法によつて測定した。二六個の試料は、振盪、比色等の諸條件を同じくして常に一括処理し、試薬類も同じものを使用した。

結果並びに考察

分析の結果は第一表並びに第二表に掲げた通りである。第一表は昭和廿六年採取の分、第二表は昭和廿七年採取の分である。第三号址は直立した細長い川原石一個から成り、試料はこの川原石が埋存した深さの土層から採取されたもので、中央即ち川原石のある部分及びその東並びに西の外廓部の土である。第四号址の試料合計一二個のうち、第一回発掘の際採取された試料4乃至11は、発掘によつて地表下約十五糎に本址の組石遺構が露出した時、その組石の深さの土層から得られたものである。第一図中に記載した、中央、南、北、南々西の試料は夫々本址の石造遺構が存在する範囲内に於ける平面的採取部位を示すものであり、南外、北外の試料は夫々今述べた本址の範囲の南方或いは北方外側を意味するものである。本址の組石遺構は東、西二個に分かれ、東側組石の中心には細長い川原石が直立しており、第二回調査の際これら二個の組石の下が夫々発掘された。東側の立石の下には、立石を中心として黄色火山灰層を堀り込んだ径八〇糎、深さ三〇糎の竪坑が発見され、試料12、13、14はこの竪坑内の土である。試料15は南外とあつは、竪坑内の試料でないことは明らかであるが、竪坑の直ぐ近傍の南外側であるか、組石の南外側であるか不明であり、又採取さ



第　1　表



第　2　表

れた土層の深さも詳かでない。但し試料は黄色を呈していないから、下部の黄色火山灰層のものではなく、黒色表土から黄色火山灰層に移行する深さの辺りから採取されたものと推定される。西側の組石下からは、黄色火山灰層に掘込んだ径二五糎、深さ二〇糎の柱穴の如き竪坑が発見され、試料16はその内部の土、試料17及び18は外側の土であるが、東側組石の試料15と同様採取部位は明らかでない。試料の色は穴の内、外何れも黒褐色を呈する。

第六号址にも細長い川原石の立石があり、その下に長径二・二五米、短径一・四三米、深さ二五糎の竪坑黄色火山灰層に掘込まれており、試料はその内部及び竪坑周辺部から採取された。黄坑周辺部の試料は黒褐色を呈し、穴内の試料は稍黄味を帯びている。

第八号址には立石はなく、組石の底面は地表下二五糎、褐色土層に接しており、その下には径約一米、深さ三十糎程の竪坑が認められ、その内部及び周辺部の土の試料夫々一個が採取された。竪坑内の試料は黒褐色、周辺部の試料の方が黄が勝つている。

第一三号址の組石遺構からも径一米一〇糎、深さ二五糎の竪坑が発見され、同じく竪坑内及びその周辺部の土の試料が得られている。試料の色は穴内が黒褐色、周辺部が黄褐色である。

既に緒言で述べた通り、この燐分析の主眼とするところは、石造遺構下から発見された竪坑内に遺骸が埋存した痕跡の有無を検索することであつたが、これら竪坑内の土の試料と比較されるべき穴周辺の土の試料の両者が採取されたのは、第二図に一括して掲げた第二回発掘調査の際の試料である。一覧に便するため、穴内の試料の燐含有量を示す線は空白とし、穴外の試料のものは黒線を用いてある。これらから解る通り、何れの遺構に関しても、穴内が穴外に比べて著量の燐を含有している状態は認められない。第四号址東組石或いは第八号址では、反つて穴外の方が穴内よりも多量の燐を含有している傾向さえ窺われるのである。又第四号址西組石或いは第六号址では、穴内が穴周辺に比べて稍多量に燐分を含むかに見えるものの、その燐量の差はこれを有意と認めるには余りにも僅少である。要するに、少なくとも第二回発掘調査の際採取された試料に関する限り、石造遺構下の穴内に特に多量の燐が残存している事実は認められず、従つてこゝに曾つて遺骸が埋存した可能性は、燐分析の結果からは裏付けることが出来なかつた。

第一表に掲げた第一回発掘調査の際の試料は、すべて組石そのものが埋存した深さの土層から採取されたもののみであるが、第一表と第二表を比較すると、第一表の諸試料の燐量は、第二表の諸試料のそれより何れも著しく多いのである。測定方法に関する説明中に述べた通り、全試料は同じ條件の下に、同時に処理測定が行われたものであるから、そのまゝ比較して差支えないのであ

る。第一回及び第二回採取の試料共、測定実施までには一年以上を経過しており、試料の風乾状態に関しても問題になる点はなさそうである。本遺跡に於いては概して表土は薄く、第四号址では表土下一五糎程の深さに組石遺構があつて、その組石は黄色火山灰層上に配石されており、第八号址では組石遺構の底面は地表下二五糎にあつて、既に褐色土層に接している状態である。従つて組石遺構の埋存面から採取された第一表の試料は極めて地表に近い表土の部分より得られたものであることは、その著量の燐の堆積を説明する上に考慮されるべき條件には違いない。しかし、それにしても尚、例えば第三号址の三試料のうち、試料3は第四号址の試料4乃至11と略々匹敵する燐量を示しているに拘らず、これに対して試料1及び2は約倍量に相当する燐の著量が検出されており、この事実は注目に値するものである。試料1及び2の燐が果して自然堆積と見做され得るか否かを検定するためには、遺跡内外の数ヶ所に於ける自然堆積土層について、表土から以下の土の試料を系統的に多数採取し、それによつて燐含有量の垂直的分布を確かめ、これを参考にすることが望ましいのである。動物の排泄物や死骸の埋沒等偶然の原因による局所的な燐の堆積もあり得ることは勿論考慮されねばならないが、そのような誤認の危険を防ぐ意味に於いても、同一地点についても、垂直的並びに平面的に数ヶ所から試料を採取する必要が痛感されるのである。要するに、目下の資料では第三号址に於ける著量の燐堆積についても、亦第一表と第2表の試料間の燐含有量の一般的著差についても、これ以上その由来或いは原因について考慮を進める余地はないのである。（東大人類学教室渡辺直経記）

考　察

今日ここに樺山石造遺構群の調査は一応完了したのであるが、樺山石造遺構が繩文文化中期の人々にとつて、どのような目的でつくられたか遂に解明することができなかつた。今日まで、秋田県大湯、本県松尾、栃木県船生など数ヶ所の遺跡が大規模に調査されている。しかしいづれの調査においても、古代人が何の目的でこのようなものを作つたかを解明する鍵は未だ発見されていないのである。

石造遺構の下に竪坑が所在するものがあることからして、墓地でないかとの想定もなされてきているのであるが、墓地であるとの積極的証左は何も得られていないのである。

本遺跡においても、そのあるものには竪坑が存在するので、その竪坑が人体を葬るほど大きなものでないものもあつたが、一応

人体を葬つたのではないかとの想定のもとに燐分析をおこなつてみた。

その結果穴内に著しく燐分の所在するようなものはなく、燐分析によつて墓地であろうかとの想定に対する手がかりは遂に得られなかつたのである。

第四号址の試料が第一回分に比較的燐分が多く、第二回の試料に燐分が極めて少いのは、第一回の折りには山林を切り開いた直後に、腐蝕した枯葉などを取り除いて発掘し、第二回目より比較的浅い箇所のものを採集しており、第一回目の時は予報にも報告したの如く、第四号址はその全貌を発掘せず地表面に近い上部の一部を露出したのみで、この露出した石の上面と下の土を採集したものであり、第二回目は碁石状の積石を全部取除いた後、竪坑の土を掘り出し、竪坑内と竪坑の周辺の黄褐色ローム層上面の茶褐色土層の土を採集しているからである。

又第三号址の中央は畑の隅の溝であり、東側は山林で、ここには畑の野菜などの残滓が捨てられ腐蝕していたことによるものと思われる。

このように燐分析の結果は各遺跡の一、二の例を除いては思はしくなく、この僅かな例は、樺山例の如く他の影響が考えられるものでもあり、今日までの研究成果では、この方面からもこの石造遺構が墓地であるとの裏付は得られないのである。

墓地でなければ何であろうか、喜田貞吉博士は嘗つてアイヌの祭壇と考えられたことがある。

しかしこの石造遺構を祭壇、又は祭祀の場、祟拝物との証左を得ることは墓地以上に困難である。

ただ今日までに調査された多くの石造遺構が聚落に近接する土地にありながら、この遺構内からは生活に必要な日常の什器、即ち土器、石器の類が殆ど出土しないと云うことから考えて、この石造遺構が住居関係のものでなく、日常の生活とは関係ないもので、何等かの宗教的な場所のようなものであろうと云うことだけは考えられるのである。勿論墓地もこの宗教的な遺跡の一つに含まれるわけである。

しかしこのような石造遺構が墓地であるならば、今日この石造遺構の分布範囲から多数この時代の埋葬人骨が発見されている中に、一例ぐらいは人骨上に石造遺構の残つているものが発見されても良いはずである。

このような例が発見されないことは異つた用途のものであることを暗示しているように思われる。

大船渡市細浦貝塚で長谷部博士がかつて人骨を発掘され、その上に環状列石があつたと報告されているが、[註一]これは径十糎大の川

原石が不規則に円形に人骨上に置かれていたもので、計画的に配石されたものか疑しい。人骨上に薄く土をかけた上に十糎内の川原石を、伸展葬の遺骸をおゝうように細長く敷き並べた例は、日本考古学協会の縄文式文化の編年的研究特別委員会が昭和二十七年度に発掘調査した福島県相馬郡駒ヶ嶺村三貫地貝塚でも認められたところであるが、これも計画的に規則正しく配石されたものではなかつた。又これは縄文文化晩期初頭のものであつた。この外の例としては抱石葬として、三〇糎大の石が一個胸部に置かれたものがある程度である。

石造遺構についての概観的な考察は、既に本報告第二輯の予報に掲載したところであり、本稿では再び記すことをしないが、予報を公刊して以後、種々新事実は判明してきているが、このような石造遺構がどのような目的をもつて作られたかの手がかりは今もつて把握されていないのであり、今後なお若干研究が進捗してから又稿を改めてこの種遺跡の綜合的考察をなしたいと考える次第である。

次に本遺構の個々のものについて考察をして見よう。

予報に報告した第一号址と第九号址、第一三号址は立石があり構造の類似したものである。又二〇号址は立石と思われるものが倒れていたが、これも類似のものと見て良いと考へる。

第六号址は組石の北東端に花崗岩質の自然石の立石ある例で、前記の第一号址の形に類似はするが、第一号址例では立石の背後にも配石あり、立石前方部の配石も雑然としているが、本址のものは長軸を揃えて縦に竝行に整然と配石されている。これは石皿を立石とした第一二号址に類似する。又立石の背後に配石のない点は、石皿を立石とする第一二号址にも類似する。第一二号址も外周の大石は長軸を縦位に配石している。しかして第六、第一一、第一二号址の遺構下には竪坑が認められた。

又第一三号址には竪坑があつたが、第一、第九、第二〇号址には竪坑が認められなかつた。

又この中、立石に深成岩類の所謂ごま石を使用しているのは第一、第六、第九、第一二号址であつた。

第四号址西側の遺構に類似の形のものとしては、第八号址がある。第八号址も、内部には碁石状の川原石を使用している。又碁石状の川原石を使用してはいないが、外形が円形をなし類似するものに第一四号址がある。第一七号址は破壊が甚しく、或は異る構造のものかとも思われるが、南側の原形をとどめるところより見ると、第一四号址に類似のもののように思われる。第七号址、第一八号址も円形に一列に配石した外周の一部のみが残つたようにも見られるが、これは破壊甚しく、一応本類からは除外して置

く、第四号址西側と第八号址には竪坑が認められたが、第七、第一四、第一七、第一八号址には竪坑は認められなかつた。

第四号址の東側は深成岩の棒状川原石の周辺に碁石状の川原石を乱積したもので、本遺構群中には、他に類品はない。

第二一号址は石が殆ど抜かれていないようで原形を保たれているもののように思われるのであるが、配石が雑然としており、疑問のものである。

第二五号址は、北側の一部が原形を保つており、この遺構の構造の大略は推知し得るものであり、本遺構が本遺構群中で最も注意すべきもののように考える。

先づ石の長軸を利用し、外周を円形に配石し、内部は長軸を中心に向け放射状に配石したものである。中心に立石のあるこのような例は大湯野中堂遺跡で日時計と呼ばれる特殊組石[註二]の外、野中堂遺跡内帯3号組石、大湯、万座遺跡の特殊組石同外帯組石第四〇号など、大湯遺跡に数例の代表的なものが知られており、本例の存在によつて、大湯遺跡の石造遺構群と本遺構群が全く無関係のものでないことを立証している。

又第四号西側、第八号址、第一四号址類似のものは大湯万座遺跡の第三区住居址の側で江坂が発掘したことがあり、[註四]これも大湯遺跡の報告に掲載されている。

江坂は縄文文化中期の時代には本遺構群の如く、遺構と遺構の間の関連性は余り考慮されず、無秩序に作られたものが、後期の時代になると、一定の大きな円形の区劃内に、二重に、或は三重に、整然と区劃され、その区劃内のみに各石造遺構が作られるようになつたものではないかと考える。又近年慶応義塾大学文学部考古学研究室で発掘調査した松尾遺跡の如きは、本遺構と同一用途のものでないかとも考えられ、これらの問題については今後の調査研究に俟つて詳論したいと思つている。

前回調査の第二号址、第三号址は独立した石が一個であり、（第三号址は立石のみで周囲の石が抜かれたものとも思われるが）これは一応疑問の遺構として置く。

又第五、第七、第一〇、第一五、第一六、第一八、第一九、第二二、第二三、第二四号の各号址は破壊甚しく、遺構の構造がどのような形のものであつたか推知困難のものである。

次に本遺跡の各遺構の調査概要を表にして見た。

	形	竪坑	立石石質	備考
第一号址	一号型	なし	深成岩ごま石	
第二号址		なし		褐立大石一
第三号址		不明	安山岩	棒状立石一
第四号址東	四号東型	あり	深成岩ごま石	
第四号址西	四号西型	柱穴状小穴あり		
第五号址	形不明	あり	安山岩	破壊甚し
第六号址	六号型	あり	深成岩ごま石	
第七号址	不明	なし		破壊甚し
第八号址	四号西型	あり	深成岩ごま石	
第九号址	一号型	なし		破壊甚し
第一〇号址	不明	？	安山岩石皿	
第一一号址	六号類似型	あり	深成岩石皿	
第一二号址	六号類似型	あり		
第一三号址	一号型	あり	安山岩	
第一四号址	四号西類似型	なし		
第一五号址	不明	なし		破壊甚し
第一六号址	不明	？		破壊甚し
第一七号址	四号西類似型？	なし		大半破壊を受く
第一八号址	不明	なし		破壊甚し
第一九号址	不明	？		破壊甚し
第二〇号址	二号型	なし	安山岩	破壊を受く
第二一号址	二一号型	なし？		

第二二号址	不明	?	破壊甚し
第二三号址	不明	?	破壊甚し
第二四号址	不明	?	破壊甚し
第二五号址	二五号型	なし	大湯に類例多きもの

（江坂輝彌記）

註一　長谷部言人　陸前国細浦上の山貝塚環状列石　人類学雑誌第三四巻五号　大正八年五月

註二　本誌第二輯　第八図参照

註三　本誌第二輯　第九図参照

註四　本誌第二輯　第一三図参照

結語

樺山遺跡は秋田県大湯遺跡についで、最初から学者の手で計画的な大規模な発掘調査を実施できた遺跡であり、開墾予定の山林内に大部分が所在したため、古い時代の開墾、耕作などによつて破壊された遺跡もかなりあつたが、造営当時の原形をとどめるものも一〇ヶ所は数えられ、これらの石造遺構は今後の研究の基準資料となり、各種の方面で役立ることができると考える。

石造遺構で最も古いとされるものは大場磐雄博士が調査された長野県上原遺跡の縄文文化前期末のものであるが、中期のもので調査されたのは本遺跡が始めてで、現在までに中期のこのような石造遺構は他に発見例がない。しかしてこの石造遺構の個々の配石構造は、縄文文化後期初頭の秋田県大湯町中通の大環状組石群内の個々の石造遺構に類似することは注目すべきことである。

今日までにはまだ数遺跡より調査が実施されておらず、これらの調査された遺跡の資料が基礎となつて、今後の類例の増加と共に次第にこの石造遺構の性格が明確になるものと考える。

又樺山遺跡も大湯遺跡同様、石造遺構と、それを作つた人々の聚落が、同一台上の近接した地域にあつたことも注意すべきことと考える。

又樺山遺跡の石造遺構の立石の多くが花崗岩、斑糲岩、閃緑岩などの、土地の人がごま石と云う、深成岩類の棒状川原石を使用している点は大湯、上原、船生などと類似するところであり、この点も記憶すべきことのように考える。又土地の人の談によればこの附近にはこのような石はないとのことであつた。

秋田、大湯遺跡の立石である石英玢岩も直線距離約十粁を峠越しに運んだ石である。

とにかく樺山遺跡の調査では、石造遺構が古代人によつて如何なる目的をもつて作られたものであるかは遂に究明し得なかつた。

しかしこの調査には、調査担当者一同、最善の努力をし、あらゆる各度からの研究を実施した。従つて縄文文化中期の石造遺構群としては始めての発見であり、又初の本格的な調査を実施した遺跡である。今後のこの種遺跡の研究には秋田大湯遺跡と共に基本資料となり永く記念されるべき重要遺跡であることは疑えないところである。（江坂輝彌記）

参考文献

江坂輝彌　江刺郡稲瀬村樺山遺跡調査予報　岩手県文化財調査報告　第二輯　昭和二七年三月

菊池啓次郎　司東真雄　武藤鉄城　文化財保護委員会編　袖野石器時代組石群発掘報告　角館時報社発行　昭和二七年十月

大湯町環状列石　文化財保護委員会　昭和二八年三月

大場磐雄　長野県北安量郡平村上原遺跡調査報告　第二次発掘調査概報　信濃第四巻第四号　昭和二七年四月

大場磐雄　長野県北安量郡平村上原遺跡第三次調査に対する一考案　信濃第五巻第四号　昭和二八年四月

追記

樺山石造遺構群は縄文文化中期の時代に作られたものだろうか。

秋田県大湯遺跡においても、環状の中に配置された石造遺構群は縄文文化時代のものではなく、後世に作られたものではないか

との疑問を持つ人があつたのであり、このことについては本報第二輯や大湯環状列石の報告にも記してあるので、ここに再度記すことはやめるが、この疑問が起きた直接の原因は石造遺構中から縄文文化後期の時代の遺物である。小土器片などが、僅かより発見されず、これは混入したものとも考えられるとの理由によるものである。

大湯の遺蹟は戦時中、神代文化研究会と云う神がかり的な団体が発掘したものを、戦後われ〳〵が調査したもので、戦前の調査はこの発掘に立合つた団体の関係者として唯一人の専門家の吉田富夫氏の執筆された報告が唯一つの手がかりであり、これらの多数の石造遺構の上部や、組石の間からどの程度に土器片などが出土したか詳細を知ることのできぬ点は甚だ遺憾に思うのである。しかし第二輯の考察で記入した如く、私は大湯の石造遺構群は縄文文化後期の時代のものであると確信している。

樺山の石造遺構群は最初からわれわれの手で発掘調査したものであり、大湯遺跡よりこの点何かと有利で、私は次に記すような理由から樺山石造遺構群は縄文文化中期の時代に作られたものであると思う。

樺山石造遺構群の二五ヶ所の石造遺構発掘中に遺構の配石の間、配石の下、遺構下の竪坑内、遺構の周辺などから出土したものは、縄文文化中期の小土器と短冊形打製石斧、石皿などの縄文文化中期の遺物のみで、他の時期の遺物は殆ど認められなかつた。ただ遺構群の中央に発掘したトレンチ内から縄文文化中期の土器片に混在して、径二糎大の土師器片が一片出土しているのが、石造遺構群所在地出土の唯一の縄文文化中期以外の時期の遺物である。

又台上の聚落址附近の畑地では若干の土師器、須恵器が表面採集できたように記憶する。

若しこの石造遺構が、土師器、須恵器の時代に作られたもので、たまたまその附近が縄文文化中期の時代の聚落址であつたため、そこから発見された石皿を立石に使い、打製石斧を乱積の組石の一つとして使つたものであると考えるならば、石造遺構の組石の間などからも、須恵器、土師器などの破片が、僅かでも出土して良いように考える。大湯遺跡に於て縄文文化後期の時代の遺物以外発見されなかつたことと軌を一にするように思われる。

大湯遺跡、樺山遺跡同様、他の調査された多くの石造遺構からも、相前後する縄文文化の数形式の遺物以外のものが出土した例は聞知していない。

以上のようなことからして私は樺山石造遺構群は縄文文化中期の時代に作られたものと考える。

しかして石造遺構群中より発見された土器片中、形式の判明し得た土器片は大木8b式と9式であつた。台上の聚落址からは大

木7a式より9式までの間の各形式の土器片が発見されている。これらの事実によつていづれの形式の時期のものと決定することは、資料不足の今日、まだ困難な問題と思う次第である。

尚本稿の測量図、実測図の製図は、すべて明治大学文学部考古学研究室の吉崎昌一氏の労作である。記して感謝の意を表する。

附　錄

一、石造遺構使用の川原石の石質

石造遺構に使用されていた川原石は、その殆ど総てが火成岩であり、東京大学理学部地質学教室の杉村新氏の鑑別結果によると立石のあるものは花崗岩であり、あるものは玄武岩であつた。又横臥して配石された川原石の多くは安山岩であつたが、この外に泥岩、玄武岩、花崗岩、輝緑凝灰岩などのものがあつた。

この中、花崗岩、輝緑凝灰岩は北上山地方面の産であり、他は北上川の転礫を採集したものかと思われた。

最後に多忙中を鑑別の労をとられた杉村新氏に衷心謝意を表する。

二、奥羽地方石造遺構発見地地名表

昭和二九年一月現在

青森県		
下北郡東通村尻屋札地	（大環状組石）	後期
下北郡東通村入口	（立石？）	（時期不明）
下北郡田名部町高梨		（筆者未見）
下北郡田名部町酪農一二号	（環状列石、立石？）	後期
下北郡川内町川内隠里	（組石）	後期
下北郡川内町宿野辺燈台宮舎東畑		後期
上北郡野辺地町		後期

上北郡七戸町倉岡梨木平　（環状列石）　後期

上北郡七戸町西野都平　（環状列石？）　後期

上北郡七戸町野左掛　（組石？）　後期

東津軽郡野内村久栗坂　（甕棺）　後期

南津軽郡浪岡町北中野天狗平　（甕棺）

西津軽郡森田村カメコ山　後期

岩手県

二戸郡金田一村舌崎　晩期

二戸郡爾薩体村堀野　（組石）　後期

九戸郡軽米町山田　（環状列石？）　不明

岩手郡松尾村寄木釜石　（環状列石）　晩期

下閉伊郡田野畑村館石野　（直線上列石？）　後期

秋田県

鹿角郡大湯町発電所附近　後期

鹿角郡大湯町関の上　後期

鹿角郡大湯町中通　（大環状組石群）　後期

北秋田郡沢口村藤株　（環状列石？）　後期？

北秋田郡早口町矢石館　（環状組石、石棺状組石）　晩期

仙北郡西明寺村八津　晩期？

仙北郡西明寺村袖野　後期

仙北郡千屋村雲穣野　（未見）

山形県

東置賜郡高鼻町小郡山蛇壇　（環状列石）　（未見）不明

西村山郡寒河江町八幡原　（環状列石）　（未見）不明

福島県

南会津郡朝日村石神　（環状列石）　（未見）

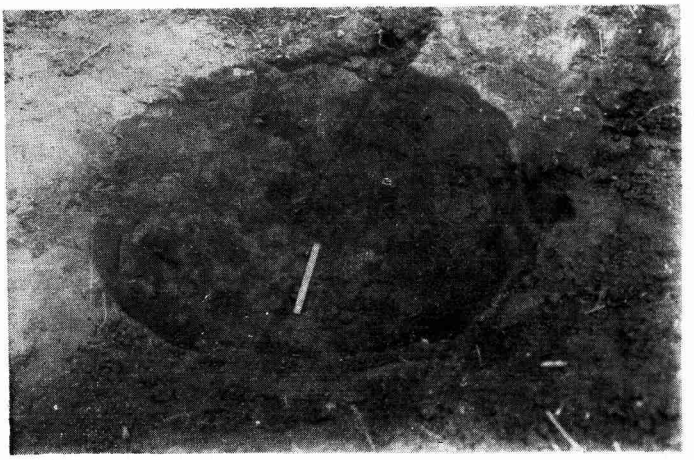
第一版図

第一図　樺山石造遺構全景（西北部櫓上より撮影）

第二図　西側より撮影の第四号址

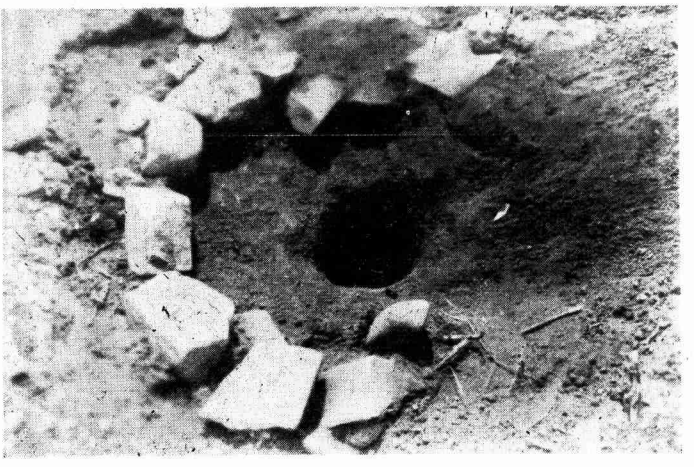
第一図　東側より撮影の第四号址

第二図　西方より東側石組下の竪坑を望む

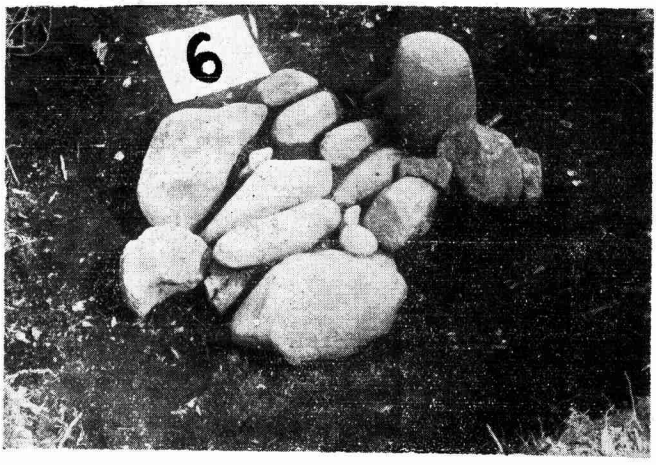


第一図　第四号址東側石組下の竪坑

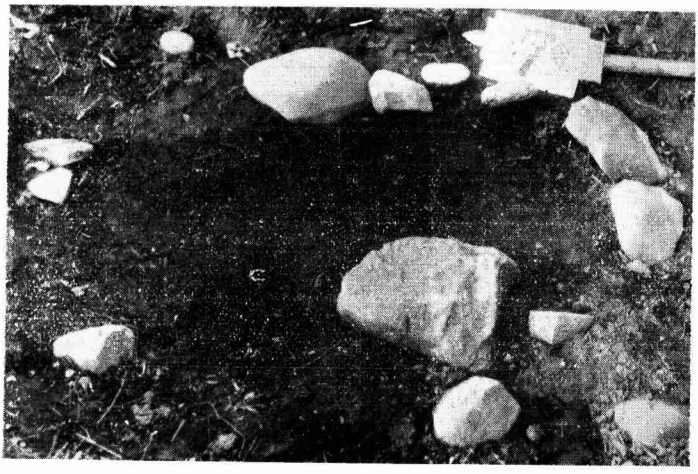
第二図　第四号址西側碁石状積石下の石組



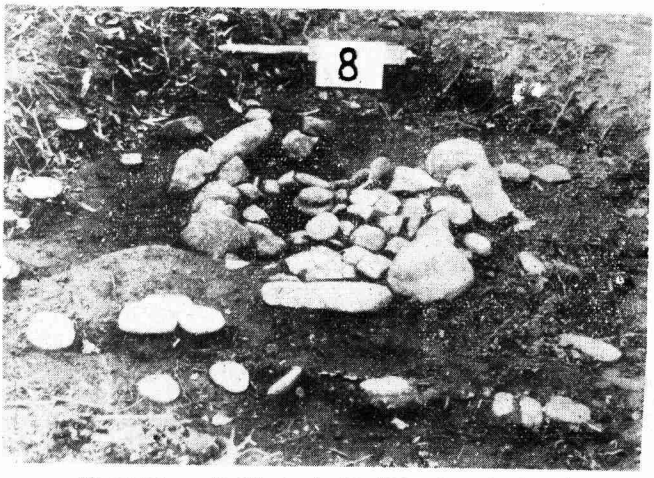
第三図　第四号址西側碁石状積石下の竪坑



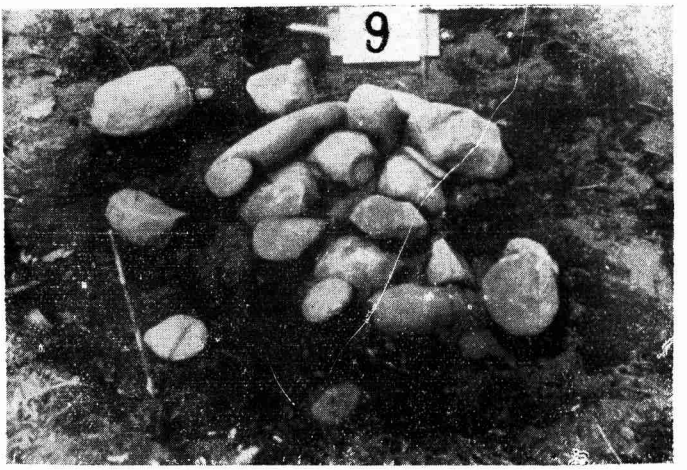
第一図　南側より撮影の第六号址



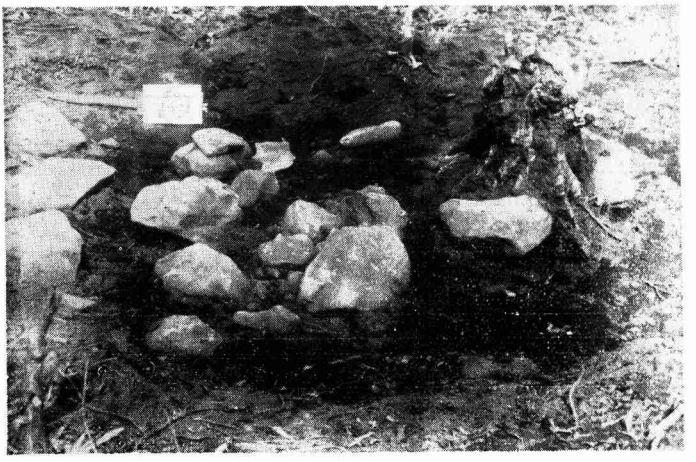
第二図　西南側より撮影の第七号址



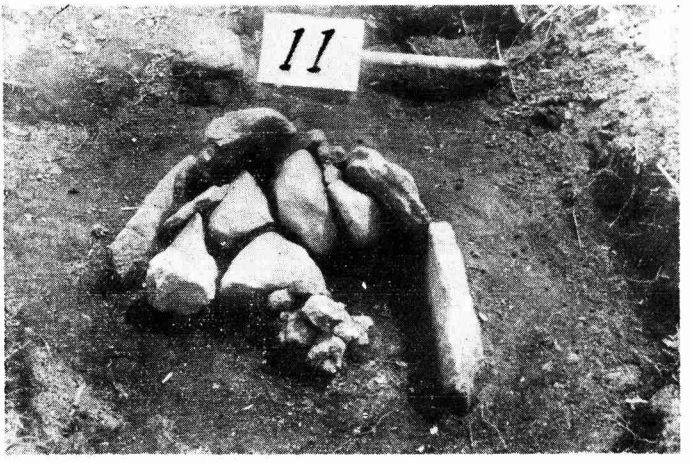
第三図　南側より撮影の第八号址



第一図　西北側より撮影の第九号址

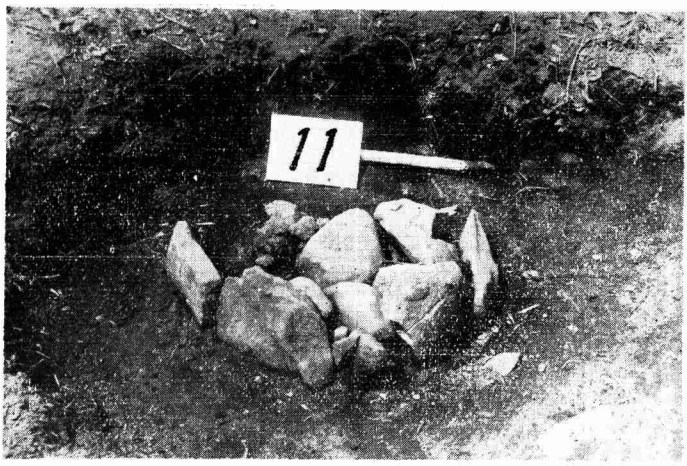


第二図　西南側より撮影の第十号址



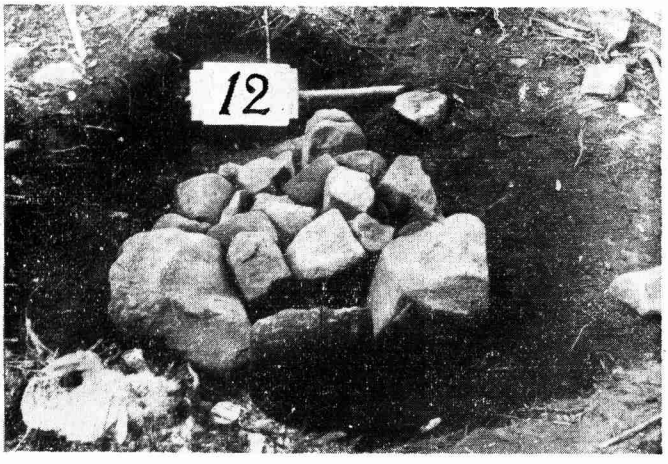
第三図　西側より撮影の第十一号址

第六図版

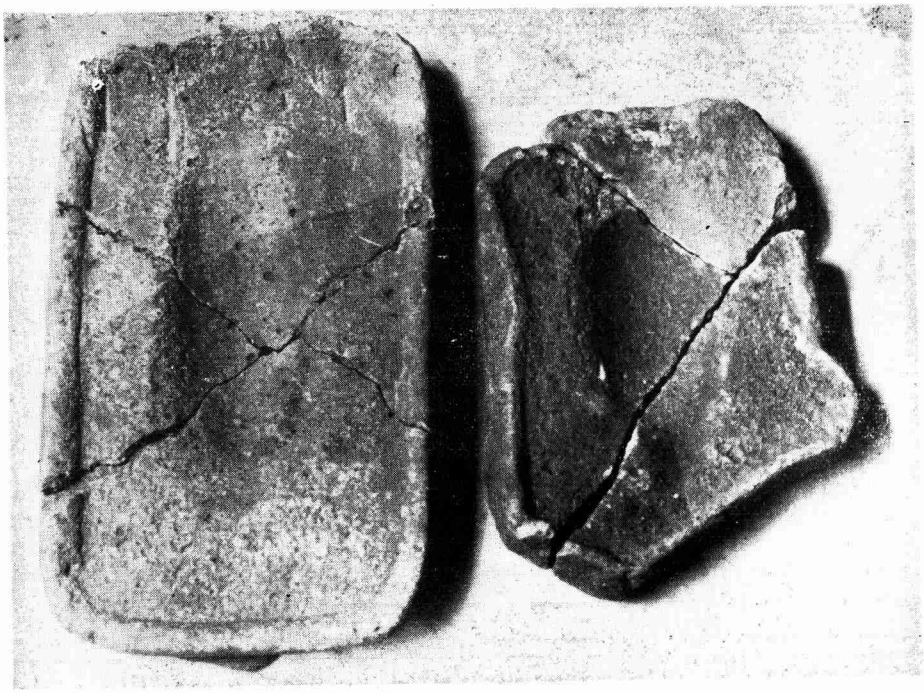


第一図　東側より撮影の第十一号址

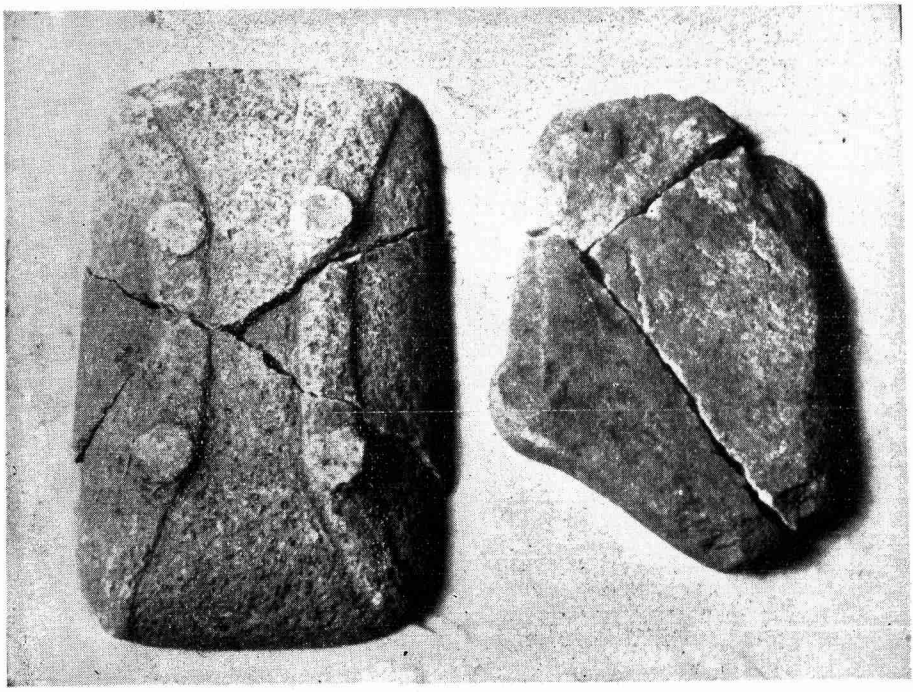
第二図　西北側より撮影の第十二号址



第三図　東南側より撮影の第十二号址

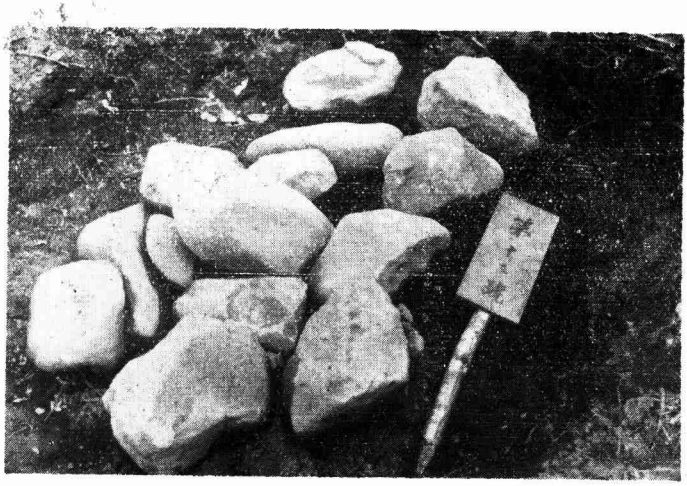


第一図　第十一号址(右)第十二号址(左)使用の石皿

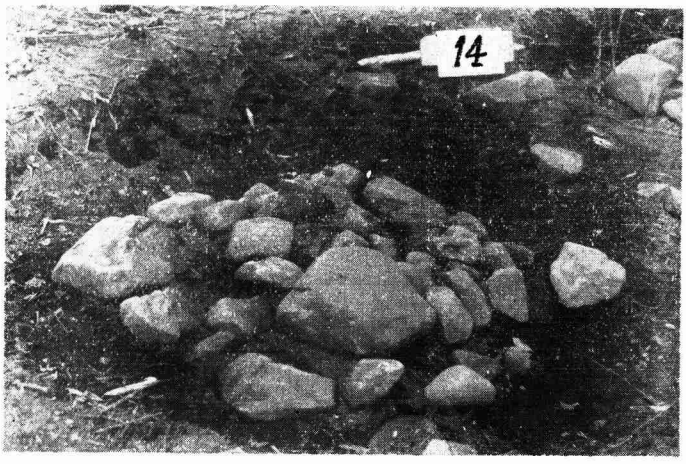


第二図　第十一号址(右)第十二号址(左)使用の石皿裏面

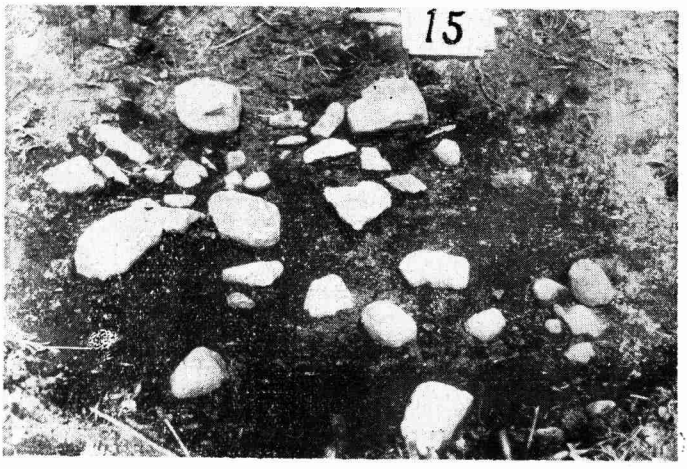
第八図版



第一図　南側より撮影の第十三号址

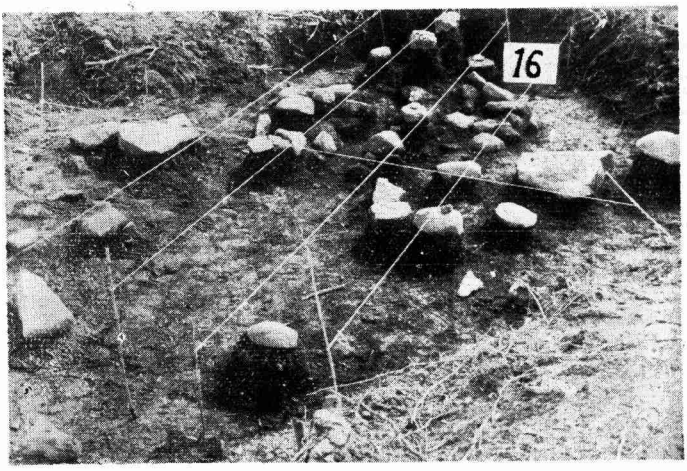


第二図　西側より撮影の第十四号址



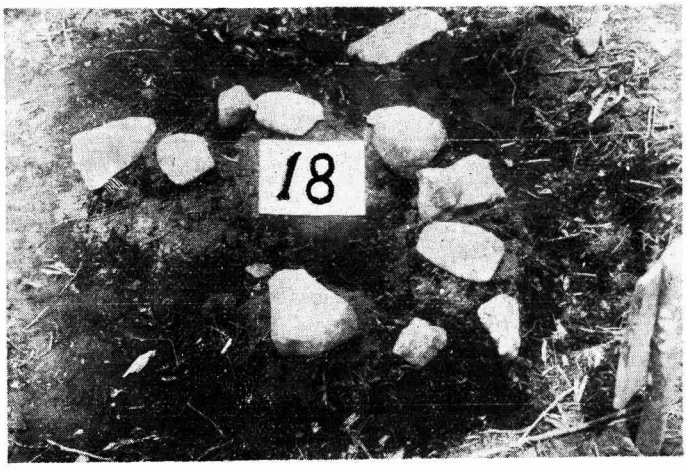
第三図　西南側より撮影の第十五号址

第九図版

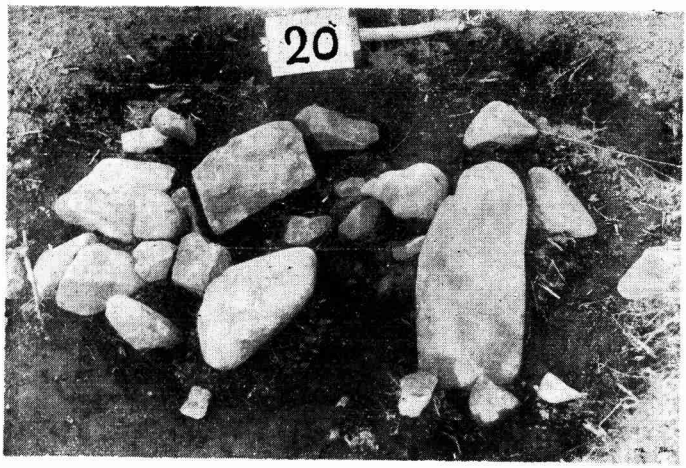


第一図　西南側より撮影の第十六号址

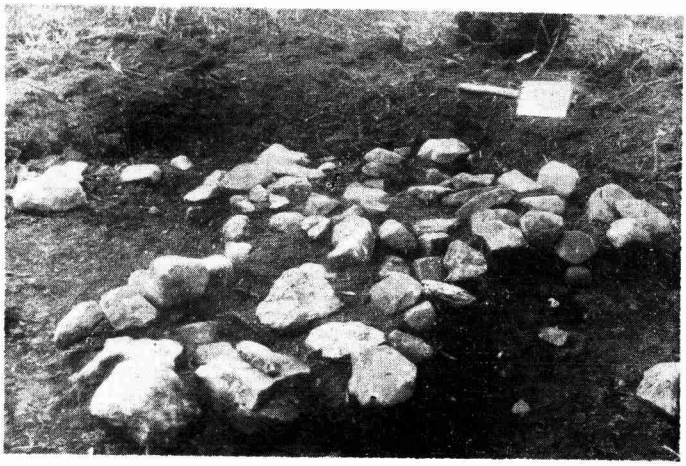
第二図　西南側より撮影の第十七号址



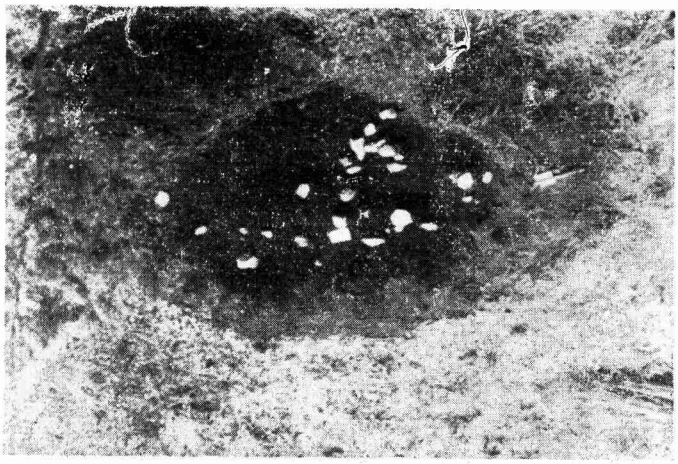
第三図　東南側より撮影の第十八号址



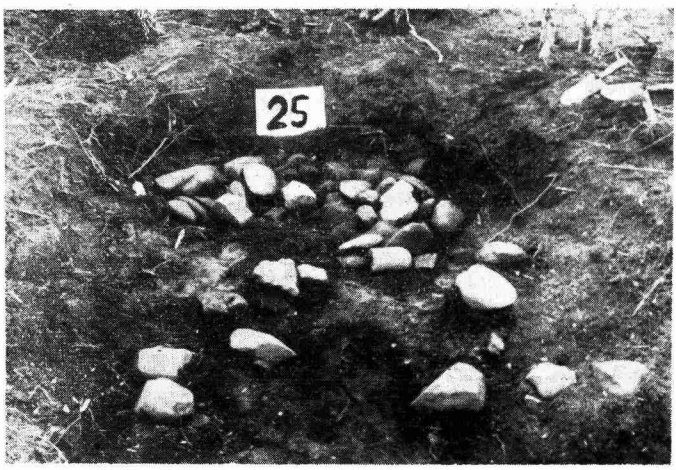
第一図　西側より撮影の第二十号址



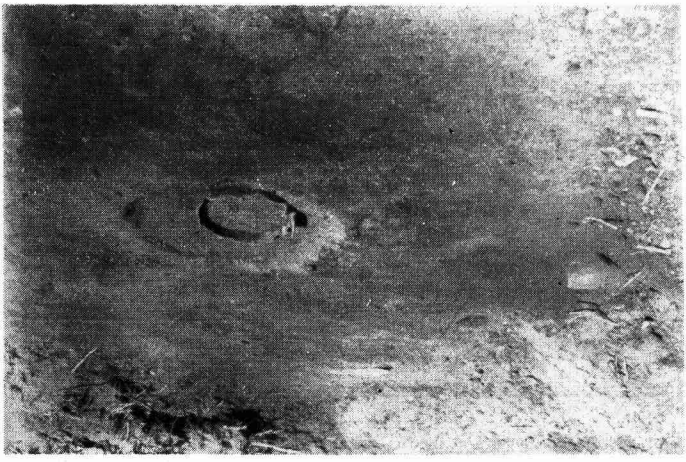
第二図　南側より撮影の二十一号址



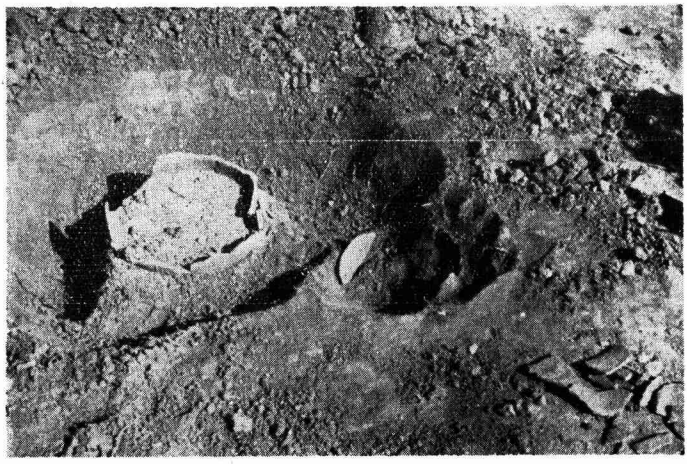
第三図　西側より撮影の第二十二号址



第一図　西南側より撮影の第二十五号址

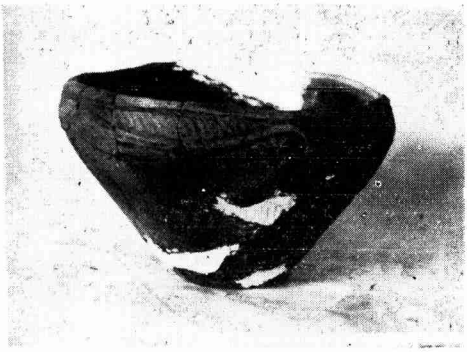


第二図　西側より撮影の住居址

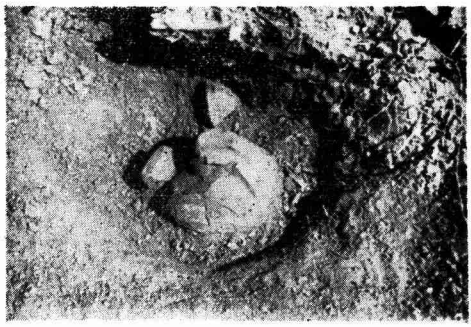


第三図　土器を利用した主炉と副炉

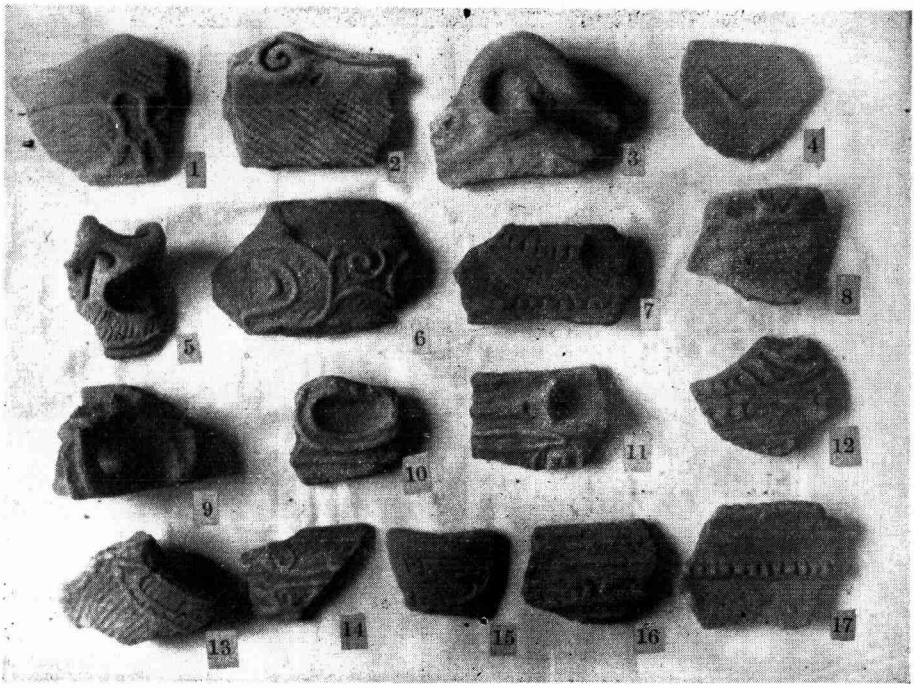
第十二図版



第一図　住居址東隅出土の鉢形土器



第二図　大木7b式鉢形土器



第三図　住居地区トレンチ出土の中期土器片

第四図　住居址出土の中期の土偶
（写真向つて左は表面右は裏面）

昭和二十九年三月二十日　印刷
昭和二十九年三月二十五日　発行

岩手県教育委員會

盛岡市六日町一二三
印刷所　富士屋印刷所